

## 「アムール／黒龍江」の歴史表象をめぐる諸問題

下里俊行\*

(平成12年5月31日受理)

### 要 旨

現在のロシア連邦アムール州ブラゴヴェシチェンスク市周辺のアムール河ないし黒龍江と呼ばれる河川沿岸地域に関する歴史表象を、ロシアの地理・歴史教科書、中国の歴史教科書、ブラゴヴェシチェンスクの観光パンフレット・市誌、黒河市の観光パンフレットを資料にして分析・整理した。その結果、同じ出来事に関してローカル、ナショナル、インターナショナルな次元での歴史表象の様々なズレが明らかになった。

### KEY WORD

practical history teaching 実践的歴史教育 cross-cultural education 異文化理解教育  
Eastern Asia 東アジア history of Russian social ideas ロシア社会思想史

### 1. はじめに

本稿の課題は、中国との国境に隣接するロシア連邦・アムール州・ブラゴヴェシチェンスク市周辺の「アムール／黒龍江」に関わる歴史表象を検討することにより、一方で、文化的他者との関係のなかで浮き彫りにされる「ロシア」的なナショナル・アイデンティティと、他方で、モスクワ、ペテルブルグを中心とするヨーロッパ・ロシアとの関係において規定される「極東」のローカル・アイデンティティの諸相とのズレと重なりを明らかにすることにある<sup>1)</sup>。そのため1990年代後半の連邦政府教育省推薦の地理教科書でのブラゴヴェシチェンスク周辺に関する記述を全国標準的な「地域」表象として把握した上で、この地域に焦点を当てながらロシア-清関係史上の三つの画期的時代：17世紀のネルチンスク条約締結前後、2) 19世紀半ばのアイゲン条約締結前後、3) 1900年の義和団運動前後の出来事について、ロシア連邦政府教育省推薦歴史教科書、中華人民共和国の歴史教科書での記述・図版を全国標準的な歴史表象として分析し、ブラゴヴェシチェンスク市の観光パンフレット・市誌での記述・図版をローカルな歴史表象として分析し、これらの表象の意味を浮き彫りにするために学術研究書等を適宜参照した。なお参照・引用するロシア語文献は末尾の文献一覧にしたがい最小限の範囲で(文献略称：ページ)の形式で示し、引用者による補足は[ ]で示した。これ以外のカッコや強調の記号は全て原文のままである。また末尾図版中の日本語は全て筆者による加筆である。

\* 社会系教育講座

## 2. 現代の「地域」としてのアムール州・ブラゴヴェシチェンスク市

ロシア極東のアムール州の州都ブラゴヴェシチェンスク市は1998年に市制施行140周年を迎えた。アムール河を隔て中国（黒河市）と国境を接する同市は、今日、中国境貿易の中心である。同市は、北緯50度20分、東経127度30分付近にあり、中国との国境を流れるアムール河中流域左岸でゼヤ河が合流する地点にある港町である<sup>2)</sup>。同市より東北方面に広がるゼヤ・ブレヤ平野を後背地としてもちそこでの農畜産物の集積・加工拠点であり、同州付近の木材の積み出し港である。行政的にはロシア極東南部の沿海地方（ウラジオストク）、ハバロフスク地方（ハバロフスク）と並ぶアムール州の州都である。人口は、1997年で22万人弱である。新潟からのアクセスは、空路にてハバロフスクに至り、そこからシベリア横断鉄道で西進し、ペロゴルスク市で分岐南下するアムール鉄道で至るコースと、空路にて黒龍江省ハルビンを経由し空路または鉄道にて同省黒河市に至り、そこからアムール河を夏は船で冬は氷上をバスで渡河・越境するコースがある。《図1》

### 2.1 「地理教科書」のなかの「アムール」表象

本節ではロシア連邦の中等学校用地理教科書の記述をブラゴヴェシチェンスク市およびその周辺のアムール沿岸地方に限定して検討する。

ソ連崩壊後に初めて導入された科目「ロシア地理」の教科書である A.B.ダリンスキー監修『ロシアの地理：中等学校8－9学年用教科書』（ロシア連邦教育省推薦、1993年）では、前半部で「ロシア人による」「探検」「調査」「開発」の歴史叙述から始まる全国的な地理的概観をおこない、後半部では地域別の概観をモスクワを中心にして、そこから北西→北部→南→東→さらに東の順序で記述している。地域別記述のなかで最後に扱われる「極東」の地域は、アムール沿岸地方、沿海州、極東北部、カムチャツカ、サハリン、クリール諸島の6つに区分され、前2地域にそれぞれ独立した節を割り当て、後4地域はまとめて一つの節で論じている。

この教科書でいう「アムール沿岸地方」は行政区分としてアムール州とハバロフスク地方から構成されるが、この区分には特別な意味を与えておらず、地形、鉱物資源、気候、工業、農業の順序で記述するなかで、一番最後の農業に関する部分でブラゴヴェシチェンスクが位置する地域に関して次のように述べている。「プリアムーリエ[アムール沿岸地方]南部は、極東の穀倉である。例えば、ここに極東の作付面積の3分の2が集中し、極東で栽培される小麦の80%、大豆の全国総生産量の60%が、それぞれ生産されている。各地でソバ、オオムギ、青草飼料用および生飼料用トウモロコシが播種されている。ここでは、牛の飼育やトナカイ飼育という畜産も発展している。プリアムーリエ南部における農業諸地域の中心地は、州都ブラゴヴェシチェンスクである。軽・食品両工業とともに、ここには機械諸工場もある。アムール川左岸にあるブラゴヴェシチェンスクを経由して、アムール川右岸の中国諸地域と国境貿易が行われている。」（ダリンスキー：193～194）

同じ極東でも農業中心のアムール州・ブラゴヴェシチェンスク市は、機械工業が発展し交通結節点であるハバロフスクよりも順番として後に記述されている。その理由として採取・狩猟・漁労→農耕→商工業という発展段階論に規定された地域の序列を読みとることもできる。その意味で漁業中心の沿海地方や極東北部・島嶼部が最後に記述されることになるのも理由がある

といえよう。

初版が1995年に出て98年に4版を重ねたアレクセエフほか『ロシアの住民と経済：普通学校第9学年用教科書』は、最初に全般的な内容、続いて各地域毎の記述とに二分されている点ではダリンスキーの教科書と同じである。しかし大きな違いは「ロシアの影響圏、地政学的影響」という項目が登場している点である。「地政学」とは、同書巻末の用語解説によれば「国家の対外政策と国際関係が、国の地理的状態およびその他の自然地理的・経済地理的諸要因に規定された政治・軍事・戦略・エコロジー・経済的諸関係の体系に従属していることを研究する学問的潮流である」（アレクセエフ：314）と定義されている。地政学の世界観においては、時系列的な発展段階の規定よりも空間的な位置関係との関連で政治（友一敵関係）に大きな意味が与えられている。したがって本書での国土形成の過程は地政学的影响圏の拡大として描かれる。そこでのアムール沿岸地方の歴史は、当初そこはネルチンスク条約により「満州人」のものとなったが、彼ら固有の国境観、すなわち「国境は双方の入植地域を分割する線ではなく双方の接触を防ぐための幅広い未入植地帯でなければならない」という観念のために彼らが入植しなかった土地に「ロシア人研究者」や「総督」が「守備所」をつくり「中国」との条約によって現在のような国境線になったというイメージで描写され、アムール沿岸諸都市には「中国」を念頭において「地政学」的に重要な前線としての意味が付与されることになる。その中でも比重は「ハバロフスク」と「ウラジオストク」とに置かれ、ブラゴヴェシチェンスクへの言及はない（同上：15）。その理由のひとつはやはりブラゴヴェシチェンスクが位置するアムール州一帯が極東のなかで農業中心の地域であるからだと考えられる。しかも経済的な観点からは、この地方は全国水準から見て低開発地域として位置づけられている。

「森林ステップ地帯に属する平野部（極東では全面積の9割が山地なのでそもそもわずかであるが）は、プリハンカイ低地とゼヤ-ブレヤ平野である。極東地域のなかでこの夏は最も温暖（とはいえ冬は少雪寒冷）であり、ここは最も生産性の高い黒色土壌である。まさにこの地方が、極東の農産物供給地なのである。だがすべては相対的である。この極東で《もっとも開発された》地方を、ヨーロッパ部と比べてみるならば、農地の割合でみるとヨーロッパ・ロシアの西部諸地域で最も低開発な地域のひとつヴォログダ州と同程度にすぎないのである。」（同上：273-274）

地域の特徴というものは、この教科書が指摘するようにまさに「相対的」である。それにもかかわらずこの地域の「低開発」を強調する意味は、地域の自立性よりも国土の一体性と諸地域の「開発」中心地への依存関係を強調することにあると考えられる。このことは、次のような呼びかけからも理解できる。「将来、極東は、もちろん太平洋沿岸諸国とますます結びつきを強めることを志向することになるだろう。しかし、その折りには、単なる原材料供給者になってしまうことは避け、広大な太平洋地域のなかで立派にロシアを代弁し、ロシアの利益を守るように努力しなければならない。」（同上：277）

視覚的な表象としては次のものが提示されている。「極東」と題した都市人口規模別指標と行政区の色分け図（図2）である。ブラゴヴェシチェンスク市は、三つの等級の中で二等級の中都市として、ペトロバヴロフスク・カムチャツキイなど6都市と同程度のもので表示され、一等級の大都市に属するのは、ハバロフスクとウラジオストクだけである。また写真は、湾内の船上から見たペトロバヴロフスク・カムチャツカキイの港の風景と「日本海で漁獲」と題する船上での作業風景の二葉である（同上：273）。したがって極東といえば漁業のイメージが印象

づけられている。

このようにして極東の諸地域の学習をした後、学習者に次のような視点と課題が与えられる。「私の視点 極東の領域には原住民諸民族が暮らしています。原住民の状態を悪化させず、この地域をどのように開発すべきですか？」(同上：278)

ここで「原住」と訳した形容詞 **коренный** は、「根」を意味する語根をもち「根付いている」という植物のイメージを帯びている。開発と「原住民」の生活悪化とが関連していることが理解できると同時に、「開発」は当為であり設問の前提である。次の学習課題には、地域特性に対応した政策決定者・経営者の発想が要求されている。「極東は、ロシアで最も面白いレクリエーション地域のひとつです。次のような観光客用の旅行地図をつくりなさい。a) 刺激的なものを好む人、b) 珍しい植物や動物が好きの人、c) 快適な休暇をすごしたい人。あなたの観光ルートのプランを略図または見取り図で提案してください。」(同上：278)

このような学習課題も「極東」の特定のイメージ形成に寄与している。すなわち「レクリエーション」産業とは、この教科書の体系の中では「国民経済」の様々な産業複合体の序列の一番最後に位置づけられている。すなわち、燃料・エネルギー、電力、金属、機械、化学・木材、軍事、農業、畜産、食品加工、軽工業、運輸、交通につづく「非生産部門、サービス部門」である(この教科書によれば「学校教育」もこの範疇に含まれる)。「サービスとは、特定の個人、個人消費者(「顧客」「クライアント」)の欲求を充たすためになされるあらゆる労働のことである」(同上：172)。その中の一つが「地域外の住民へのレクリエーション・サービスで、主として旅行・観光組織、またサナトリウム、ペンションなどである」(同上：173)とされている。

このような経済的地域理解は、次に見る自然地理教科書での地域表象に対応している。1998年に第2版(初版は1997年)がでたラコフスカヤ『**地理：ロシアの自然：普通学校第8学年用教科書**』では、全般的記述、地域別記述とならんで「天然資源の合理的利用と自然保護」の章がある。極東の自然環境についての学習課題として、次のような質問がなされている。「極東の天然資源とその利用について述べなさい。極東の様々な地域の開発にさいしてどのような困難が生じていますか？」(ラコフスカヤ：260)。このように地域学習にさいしては、自然地理的要素と経済地理的要素とを密接に関連づけることが要求されている。

1998年に第4版が出た世界地理の教科書、グラツキイ、ラヴロフ『**世界の経済的・社会的地理：普通学校第8学年用教科書**』では、最初に「人間による地球の開発」という章の中で「自然環境に対する社会の影響段階」と題する表が掲げられている。それによれば影響の諸段階は一番下の第1層から一番上の第5層まで層をなしており、最下層におかれた「採集・狩猟・漁業」からはじまり「農業革命」、「土地に対する負荷の増大、手工業の発展、経済循環への天然資源のより広範な包摂」、「産業革命」、「現代の新技術革命の段階」の順序で番号がつけられている(グラツキイ：9)。以下の章は、「天然資源」「人口」「世界の政治地図」「世界経済」「地域の地理」「人類のグローバル問題」という構成である。「地域の地理」の章では「発達した国々」と「発展途上の国々」とが区別され、その主要基準は「国内総生産」であるとされる。前者の国々の一つとして、ロシア連邦ではなく「旧ソビエト連邦領内に形成された諸国家」が挙げられ、「国内総生産の絶対的指標でいえばソ連は世界的リーダーの一つであった」と記述され、「アメリカ合衆国、西欧諸国、日本は、現代の外国世界において独特の《三角形》を構成している」という記述がつづく(同上：120)。「中華人民共和国」については「最近の数十年間に困難で矛盾に満ちた歴史的発展行程をへて世界経済の中ですます巨大な重みを増している」と指摘し

た後で「しかし国内総生産、一人当たりの工業生産では中国は発達した国々から著しく立ち後れている」と結んでいる（同上：123）。各国別の記述は、アメリカ合衆国からはじまり順次、東方へと移り、「アジア諸国」「日本」「中国」「インド」という順序で配置されている。中国国内の地域区分は、〈図3〉「中国の経済ゾーン」のなかで発展段階に応じて三区分別色で色分けされ、アムール対岸の黒龍江省を含む地域は赤色の「高度に発達した沿海地方」として北は「ハルビン」から南は「海南島」にいたる帯状の領域に一括されている。これに対して「中程度に発達した中央諸地方」（緑色）、「低開発な西部・北西地区」（黄色）とに色分けされている（同上：180）。アムール対岸の地域についてロシアの世界地理の教科書が示す表象は、このように一国完結的で自国地理との接点をもたないものである<sup>3)</sup>。

## 2.2. ブラゴヴェシチェンスク市のローカルな表象

それではこのような全国レベルの教科書記述とは別に、ローカルなレベルではアムール沿岸地域はどのように表象されているのだろうか。

総頁数が50頁のパンフレット『アトラス：ブラゴヴェシチェンスク』は、地元のブラゴヴェシチェンスク最大のショッピングセンターを運営する株式会社〈アムール・ヤルマルカ〉が資金を出し、同市の市長が挨拶を寄せ、教育学者、歴史学者、地理学者が本文を執筆しているガイド・マップである。「統計データ」と題する頁では、この地域の経済の特徴について次のように述べている。「ブラゴヴェシチェンスクは、州の工業中心地であり、州全体工業生産の4分の1を生産している。[…]今日、ブラゴヴェシチェンスクはロシア沿海地方の一大ショッピング・センターであり、ロシアとアジア太平洋諸国との交易はブラゴヴェシチェンスクを經由して行われており、100以上の合弁・外資企業がある。[…]1980年代以降、外国との合弁による貿易取引が活発におこなわれ、市経済の不可欠の要素となっている。[…]昨年（1996年）は、国際交流の幅が拡大した。市の主要な経済パートナーは、北東アジアおよび東南アジアの国々の企業であり、そこには、中国、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、日本、ベトナム、シンガポール、イギリス、ドイツ、イタリア、ポルトガル、アメリカ、パナマ、ウクライナ、ベラルーシ、ウズベキスタン、アゼルバイジャンが含まれる。[…]対外貿易の組織において重要な役割を果たしているのが、ブラゴヴェシチェンスク税関事務所である。主要な輸出入貨物は、税関〈ブラゴヴェシチェンスク〉を經由している。市はロシアや旧ソ連の30地域とアジア太平洋諸国との対外経済関係のための運輸サービスを提供するセンターの役割を果たしている。」（アトラス：4-9）

このように市当局によってオーソライズされた地域認識によれば、ブラゴヴェシチェンスクでの国際貿易の重要性は決定的であり、全国レベルの地理教科書が提示する農業と観光が中心の「最も低開発な地域」というイメージとのコントラストは鮮明である。

この地域社会は、地理教科書で経済部門の最後尾に位置する「サービス業」においても重要な個性をもっている。地域の「人材」養成の場としての教育機関に関する記述は、次の通りである。「ブラゴヴェシチェンスクは、極東の最大級の学術教育センターである。4つの高等教育機関：アムール国立総合大学、極東国立農業大学、アムール国立医科アカデミー、ブラゴヴェシチェンスク国立教育大学（1930年開設の極東最古の大学の一つ）のほかに、モスクワにある国際ビジネス・アカデミー付属ブラゴヴェシチェンスク教育センター、極東陸軍士官大学校、ブラゴヴェシチェンスク赤旗戦車隊幹部養成大学校がある。」（同上：14）

このような教育機関の大規模な集積とその個性は、ソビエト時代の中央集権型の地域政策の

もとで形成されたものであり、それ自体がこの地域に課せられた国策上の役割を物語っている。「サービス業」のもう一つの部門、リクリエーションにかかわる地域の自然環境についての記述は次の通りである。「ブラゴヴェシチェンスクとその近郊は、四季を通して魅力的である。四季折々の自然は、様々な種類のレジャーに適している。市はステップ地帯と森林地帯が出会う境界地帯にあり、そのため街路は樅、菩提樹、樺の木、ポプラ、トネリコ、カエデの緑で覆われ、春にはタンポポが咲き乱れ、ライラックの香りが漂う。アムール河とゼヤ河は、カワカマス、コイなどの魚が豊富に棲息し、川岸には水鳥が営巣している。ブラゴヴェシチェンスクのアムール上流沿いのムラヴィヨフ公園では、ニホンヅルとダウリアヅル〔和名：タンチョウ〕が保護されている」（アトラス：40-41）。

全国版の自然地理教科書では、自然は危険でコントロールすべきものとして描かれ、アムール河とゼヤ河の「破滅的な洪水」と治水事業の重要性が強調されている（ラコフスカヤ：255）。同じ自然環境もローカルなレジャーの視点から描くと違って見えるのである。

パンフレットの中で美しく描かれた自然環境の中で期待される「リクリエーション」とは次のようなものである。すなわち、ブラゴヴェシチェンスク近郊の「おとぎ話に出てくるような自然保護公園」にあるキャンプ場、子どもアスレチック・キャンプ場、子どもサナトリウムでのリクリエーションであり、そこは「一年中、空気は澄んで清く、冬は雪に覆われて静寂で、厳冬でも凍らない無数の湧出泉があり、春にはツツジ、サクラ、ついでシャクヤクの白い花が開き、白とスミレ色のアイリス、スズランが咲き、絵画のようなガリャンスコエ湖の湖面に松・樅・白樺の枝葉が映し出され、夏と秋には様々な茸が沢山とれる」場所である。また「休日には、遊覧船でアムール河から市街を眺めることもできるし、友達と会ったり、おしゃべりをしたり、アムール河の壮大な眺めを堪能するのもってこいの場所が、河岸通りである」という。さらに「観光」と題された頁では「ブラゴヴェシチェンスクは地域の文化センターである」と述べ、映画館、郷土博物館、ドラマ・コメディ劇場、人形劇場などの文化娯楽施設、交響楽団、民族音楽合唱団、聖歌合唱団、児童アンサンブル「ロヴェストニキ」といった文化団体、様々な体育・競技施設での成人・児童クラブの活動が紹介され、「アムール動物園」や「ディノザウルスの墓」という恐竜の化石展示場、ロック・クライミングのポイントとともに近郊の「ムラビヨフ自然保護公園では指導員によるエコロジー教育、環境保護教育が実施されている」という（アトラス：43-44）。

このような記述は、一方で市当局が内外の住民向けに描き出した心地よい観光都市のイメージであるとともに、ある程度のリアリティをもっているとも言える。筆者とハバロフスクから乗り合わせた学生たちは、夏休みを過ごすためにブラゴヴェシチェンスクに行くと話してくれたが、真夏の夜の河岸通りのカフェテラスの賑わいは12時過ぎても静まることはなかった（1998年7月取材）。

このようなブラゴヴェシチェンスク市のレクリエーション機能のほとんどは、ソビエト時代に重点的に整備された結果として今日に至っているものであろう。これに対してソ連崩壊以降の新しいレジャーの場は1991年以降に出現した「多様な所有形態の新しい店舗」であり、例えば市最大のショッピング・センターとしての《アムール・ヤルマルカ》である。それはかつて東シベリア総督が予言したとされる「アムール沿岸地方および極東の最大級の商工業中心地」としてのブラゴヴェシチェンスクの新しい一面である（アトラス：45-46）。

しかし、このようなローカルな地域表象からは見えにくくなっている市の個性の重要な側面

もある。連絡船で20分で渡ることができる対岸の黒河（ヘイホー）市の観光パンフレットでの記述を見てみよう。〈図4〉はブラゴヴェシチェンスクの波止場から遠望した対岸市街地（写真中央）である（上越市広報課提供，1998年7月撮影）。

黒河市人民政府新聞辦公室・黒河市対外文化交流協会『黒河旅游』（発行年無記・1998年現地購入）では、「黒河は1988年より〈中ロ一日観光ルート〉を開設して以来、中ロ双方の国境を出入りした観光客が70万人以上に達した」という（2頁）。つまり中国語読者にとって見れば黒河市とは中ロ国境を跨ぐ観光地なのであり、「布拉戈維申斯克（ブラゴヴェシチェンスク）」はすでに「ヨーロッパ」への入口として認識されているのである。そこでは、「北国風光欧亜情調」（46-47頁）が強調され、「雨上がりのブラゴヴェシチェンスク駅」「赤軍烈士記念碑」「無名英雄記念碑」といった名所とともに「ロシアの子ども達」、「砂浜でくつろぐロシアの家族」、「中国の客人を歓迎するのに用いられる最高の礼節を表すパンと塩」〈図5〉、「中国の子どもたちを歓迎する様子」〈図6〉、「中ロの子ども達による友誼歌の合唱」〈図7〉、などの写真が掲載されている。主要な観光ルートは「黒河-ブラゴヴェシチェンスク一日遊」として「乗船（夏）あるいはバス（冬）で黒河から出境しブラゴヴェシチェンスクに向かい、レーニン広場、博物館、無名英雄記念碑、アムール[阿穆爾-黒龍江と表記しない点が興味深い]河畔、商店、街並みを参観遊覧」するコース、「二日遊」として一日コースに「ゼヤ[結雅]河、農場、夜晩での歌舞表演の観覧、〈友誼〉ホテルあるいは同クラスのホテルでの宿泊」、翌日には「新興地区、商店、展示販売センター、ゼヤ大橋の参観遊覧」とあり、「三日遊」では「ロシア家庭訪問」、「公園、学校、宝石店の参観遊覧」が加わる。五日以上のコースではハバロフスク、ウラジオストク訪問あるいは空路によるモスクワ、ペテルブルグ訪問などがある（11-16頁）。

黒河市人民政府新聞辦公室・黒河市対外文化交流協会『中国黒河』（発行年無記・1998年現地購入）でも「跨国旅游新拠点：俄羅斯[ロシア]風情」と題して様々な対岸の表象を提示するとともに注目すべきは、「繁栄活躍の対俄文化交流」という大見出しのもとで「対ロ文化交流の発展はもはや黒河文化の一大特色となった」と指摘し、研究者、教員、学生、児童による交流実績について具体的数字を挙げるとともに、また「洋嫁」と題して国境を越えたカップルの結婚式の写真〈図8〉を掲げている（35頁）。

水面の連続性を自己のメリットとする河川港、そしてこの港を基盤として国内外と深く結びついている地域経済、そして水面を隔てて隣接する異文化、そのことが自然環境の豊かさと結びついた形で形成された観光産業、他方で河川がつくりだした豊かな土壌をもつ平野部での主要産業としての農業、その生産物を加工する軽工業の展開、それとともに中央の地域開発の拠点として政策的に設置された教育大学を筆頭とする教育・研究機関と軍幹部養成機関、そして新たに発展した商業基盤、これらがこの都市を彩る主要な特色である。

### 3. 局地的・全国的・国際的な文脈のなかでの「アムール／黒龍江」の歴史表象

前章では、ロシア連邦教育省推薦の地理教科書で提示された極東、アムール州、ブラゴヴェシチェンスク市の地域表象の意味を検討し、これらをブラゴヴェシチェンスク市や黒河市でのローカルな表象と対比させながら、この地域の個性を明らかにした。次に検討するのは、歴史教科書、市誌や公的展示物において観察することができる歴史表象である。それらは地域を歴史的な時空間の中に位置づけることで国家や都市としての一体性を構築するための重要な文化

装置である。本節では、同一の河川が「アムール/黒龍江」と二通りの名前で呼ばれていることの意味を含め、実在する河川とその沿岸地域をめぐって浮き彫りされるナショナルおよびローカルな歴史表象の相互のズレに注目していく。

### 3.1. ローカル・アイデンティティの素材としての都市の歴史表象

最初に、ブラゴヴェシチェンスクの通史的な見取り図を把握するために、前節でも用いた観光パンフレットでの歴史記述を紹介する。パンフレット『アトラス：ブラゴヴェシチェンスク』の表紙〈図9〉には、市の紋章が右肩に掲げられている。それは「緑地の盾に波状の銀色の帯、帯の上部に黄金の八角星が三つ、盾には往古の皇帝の王冠が冠せられ、そのまわりをアレクサンドル様式のリボンによって束ねられた黄金の櫛の枝葉が取り囲んでいる。1878年7月5日、皇帝[アレクサンドル2世]が下賜したもの」〈図11〉であるという（ロシアの都市：47）。（ただし現用の市章では櫛ではなく麦である。）中央には「アムール州郷土博物館」（1891年設立）の写真が掲げられている。紋章は、帝政ロシアとの一体性を象徴するものであり、博物館は、この地域のあらゆる記憶と記録を集積し展示する場所を示している。そして見開きには、帝國的なものや地方的なものとを接合する象徴として、市長の肖像写真の上には「ニコライ・ニコラエヴィチ・ムラヴィヨフアムールスキイ：1809-1881年」と刻まれた台座の上に立つサーベルを掲げた軍服姿の東シベリア総督の銅像の写真が掲げられている〈図10〉。本文冒頭で描かれるこの都市のローカルな歴史は次の通りである。

ブラゴヴェシチェンスクは、その建設の当初より良き知らせとともにロシア史に加わった。良き知らせとは1858年のアイグン条約調印によるアムール沿岸地方のロシア領への復帰であり、それはピョートル1世が着手した歴史的偉大な偉大な完成であった。アムール河とゼヤ河が合流する地点に位置するその立地条件の良さは、すでに17世紀のロシア人探検隊たちによって着目されていた。順次行われていたアムール河の筏での下流への航行により1856年にここにコサックと正規軍第13大隊からなる探検隊、つまり最初の建設者がこの地に上陸し、東シベリア総督ニコライ・ムラヴィヨフの指令によりコサック兵村ウスチ・ゼイスカヤを築いた。まもなく1858年7月5日（西暦17日）に、ブラゴヴェシチェンスクと改名されていたコサック兵村は市へと昇格した。ブラゴヴェシチェンスク市の全歴史はアムール沿岸地方の発展と結びついており、今日にいたるまで市はアムール沿岸地方のビジネスと行政の中心である。19世紀末にかけてアムール流域で最大の都市、アムール沿岸地方の金鉱と農産物の集散地、アムール河の最重要港、河川運輸の中心地となった。外国の干渉と国内戦の厳しい時代にブラゴヴェシチェンスクはアムール州の他の市町村とともに極東および東ザバイカル地方で最初のソビエト人民権力による解放区となった。その後の市の改造のために工業発展の潜在力としての学校が増設され専門学校・大学・研究機関が設置された。大祖国戦争〔第二次世界大戦〕期間中、ブラゴヴェシチェンスクは軍国主義日本に対抗する前線都市・前哨基地になった。この地から1945年8月にソビエト軍は彼らを粉砕するために軍事行動を開始したのである。戦後は、近代的なブラゴヴェシチェンスクのあらゆる基礎が築かれていく。都市は再建され改造されていく。1948年には、ロシア社会主義共和国連邦の独立した行政区としてのアムール州の州都となった。他の極東の都市と同様に、ブラゴヴェシチェンスクでも多くの歴史的・文化的伝統が、なによりもまず民族文化が大切に保存され継承されてきた。ブラゴヴェシチェンスク人は、すべてのアムール人と同様に、ひじょうに勤勉で忍耐強くまた歓待精神に富んでいる。まさにこのことが我が故郷の町の栄えある有



望な未来ための礎なのである。(アトラス：4-5)

冒頭に言う「良き知らせ」(ブラゴイ・ヴェースチ)とは、ロシア正教会でいう「生神女」(いわゆる聖母)の受胎告知のことで、転じて「朗報」を意味し、市名の由来でもある。したがってこの都市の名称は、自ずとロシア正教会固有の宗教性を漂わせている。この宗教的イメージは、市制140周年式典での最後の演目である舞踏組曲「ルーシ」〈図12〉(図の被り物は金色で衣装は白：1998年7月18日筆者撮影)でも観察することができる。引用文にみる簡潔な歴史叙述の特徴は、ピョートル大帝以降のロシア国家史の一部として自己を位置づけつつも、アムール沿岸地方の中心としての自己発展の論理で都市史を描いている点である。また特徴的なのは「ブラゴヴェシチェンスク人(благовещенцы)」「アムール人(амурчане)」という自称である。

### 3.2 「歴史教科書」が提示する「アムール／黒龍江」の諸表象

このようなローカルなパンフレット制作者たちが描き出す都市の歴史表象は、ロシア連邦の全国標準的な歴史表象や中国の歴史教科書とどのようなズレと重なりをもっているのか?この点に注目しながら以下では、対象時期を19世紀末までに限定して「アムール」沿岸地方に関する記述を歴史教科書毎に検討する。

#### 3.2.1 西暦1689年のネルチンスク条約締結前後の時代

ひとつの参考として、最初にソ連時代の記述の一例を挙げておきたい。先史から18世紀末までの自国史を扱うリュバコフほか『ソ連史：中等学校第7学年用教科書』(1987年)では、「アムール沿岸地方には農業に携わる種族が暮らしており、彼らは穀物やその他の作物を栽培していた」(リュバコフ：176)と述べている。近隣の諸民族として牧畜に従事していたヤクトとブリヤートに言及しているが、アムール沿岸での農耕民たちは、その他の石器段階の諸族とおなじく固有名を挙げられていない。他方「ロシア人のシベリア進出」の節では「エロフエイ・ハバーロフの探査」に続いて、次のような記述がある。

「17世紀半ばにアムール沿岸地方にはロシア人のコサックと農民が、入植するようになった。この時期、中国は、戦鬪的な満州の諸侯たちによって占領されていた。中国での民衆の抵抗を鎮圧したのち、満州王朝・清の支配者は、アムール沿岸地方に大軍を派遣した。彼らは、ロシア人のコサックと農民が開墾した土地(アルバジン軍管区)の一部を占領した。ロシアは、ここに防衛のための十分な軍事力を配備することができず全面的な衝突を回避した。1689年にネルチンスク条約が結ばれ、それによって国境はきわめて曖昧になった。ロシアと中国との交易が発展した。」(同上：176-177)

この記述が描き出すイメージは、「ロシア人のコサックと農民」が「入植」したアムール沿岸地方が「満州王朝・清の支配者」の大軍に「一部占領」され、ネルチンスク条約により「国境はきわめて曖昧になった」と同時に「ロシアと中国との交易が発展した」という物語である。元々国境はなかったにもかかわらず、それが「曖昧」化したという表現や条約締結との関係がちぐはぐな印象を与えている。

このようなソ連時代の歴史記述を念頭において、1990年代後半の歴史教科書での記述に目をむけてみよう。『ソ連史』の編集者リュバコフを含む執筆陣によるプレオブラジェンスキイほか『祖国史：中等学校6-7学年用教科書』(1999年第4版)では「ロシア人のシベリアへの進出と

現地「の諸民族」の節でアムール沿岸地方について詳細に記述している。

「1643～1646年にヤクーツクからヴァシリイ・ダニロヴィチ・ポヤールコフの指揮で官吏と志願者（《オホーチイ》）からなる部隊がアムールに遠征した。ポヤールコフ隊は、アムール河を海口まで流下し、帰還後に自分たちが発見したことについてヤクーツク知事に伝えた。新たなアムール探検を1649～1653年に行ったのは、エネルギーで企業心にとんだ商人エロフェイ・パヴロヴィチ・ハバーロフであった。この遠征は、農耕部族のダウル人とヂュチェル人が暮らしていたアムール沿岸地方をロシアのものとして定着させた。アムール沿岸に自由なロシア人の移民が押し寄せ、ここにアルバジン町やいくつかの村を築き畑作をおこなっていた。ところが中国の満州王朝は、ロシア人たちに向かって大軍を派遣した。コサックたちは敵に対して何度か敗北をこうむらせたが、あまりに少ない軍勢だったのでこの地方を確保することができなかった。ロシアは隣の大国との紛争を拡大するつもりはなかった。1689年にネルチンスクで講和が結ばれた。条約によって明確な国境線はひかれなかった。しかしロシア人たちはアルバジンを手放さなければならなかった。この地方は長い間、誰のものでもない状態だった。条約によってロシアと中国との貿易が始まった。」（プレオブラジェンスキイ：180-181）

『ソ連史』との違いは、出来事を叙述する際の視線がマイクロ化し、登場する行為者も具体的に人物・民族名を表記している。それだけ具体的な印象を与えるものとなると同時に、個々の人物たちの行為の評価も焦点に入ってくる。ポヤールコフの遠征隊については、同時代の呼び方「オホーチイ」に焦点をあて彼らの遠征の自発性を強調し、商人ハバーロフの人物像は「エネルギーで企業心にとむ」ものとして肯定的に描いている。他方、ここで登場する他者表象である「ダウル人」と「ヂュチェル人たち」がロシアに服属したかのような印象が与えられている。また国境を明確に画定しないような条約締結の意味も不明である。「ダウル人」らについては後で触れるが、全体として不自然な印象がもし出されている。

近代世界史の教科書、ユドフスカヤほか『近代史：1500-1800年：中等学校第7学年用教科書』（1998年第2版）は、記述量の面で西ヨーロッパ史中心の構成であり、アフリカは取り扱わず、末尾で「16～18世紀のラテン・アメリカの植民時代」につづいて「近代のアジア諸国」が取りあげられている。インド、中国、日本を扱うこの章のなかで「中国」の節では、16世紀末以降に現在の東北中国で「満州人」が強大になり、「朝鮮王朝」を「服属」させ明朝を滅ぼし、1644年～1911年まで続く「満州人の清朝」を樹立する経緯が記述され、17世紀の近隣民族への「侵略戦争」と18世紀の「海禁」策が描かれている。しかしロシア史との接点は全く不在である。（ユドフスカヤ：239-241）

サハロフほか『最古から17世紀末までのロシア史：普通教育機関第10学年用教科書』（1998年第4版）は、「シベリア併合。非ロシア人諸民族」の節で次のように記述している。

「17世紀半ばにはロシア人たちはアムール河にも登場している。そこにいたる主なルートは北方のヤクーツクからのものであり、そこから出発してB. D. ポヤールコフの探検隊が、その後E. П. ハバーロフの探検隊がやってきた。アムール沿岸地方には、ロシア人の町、越冬地、自由農民村が現れている。アルバジン（1651年）、クマルスク（1654年）、コソゴルスク（1655年）、ネルチンスク（1654年）などである。アムール沿岸地方はロシア領の一部となる。このことは当時中国を占領していた満州人の支配者の不満と抵抗に出会う。1689年のネルチンスク条約はアムールとその諸支流でロシアと中国の領土の境界を引いている。」（サハロフ：282）

また「17世紀におけるシベリアのロシアへの併合」と題する地図《図13》では、ポヤールコ

フとハバーロフの行路を示すとともに、他ならぬ条約締結の前年である「1688年のロシアの国境線」として大興安嶺とアムールをつなぐラインとそこから海までのアムール沿岸地帯とサハリン南部が共有地帯のような形で記されている（同上：281）。他の教科書に比べて多くの具体的な地名を挙げ、地図とあわせて読むとき「ロシア」の空間的領有の拡大に注目せざるを得ない。これらの表象がかもし出す物語は、無人の土地に「ロシア人」が探検・定住しはじめたが「中国を占領していた満州人の支配者」たちの抵抗にあい、条約の結果、若干の曖昧さを残しながらも現在とはほぼ同じ形でアムール沿岸以北がロシア領になったというものである。

おそらくアムール沿岸地方に暮らしていた人々に関する叙述の網の目が最も細かいのがパヴレンコ、アンドレエフ『最古から17世紀末までのロシア：普通教育機関第10学年用教科書』（1997年第4版）であろう。「シベリア開拓」の節でシベリアの非定住生活の諸民族を紹介するなかでアムール沿岸地方について次のように述べている。

シベリアの定住民としては、アムール流域に居住していたダウル人、チュチェル人、その他の民族がいた。彼らは高収量の農耕を熟知していた。彼らは、小麦、ライ麦、キビ、ソバ、大麦、エン麦、その他の作物を栽培し、また牧畜や果樹栽培さえも営んでいた。（パヴレンコ、アンドレエフ：281）新しい土地の輝かしい発見者は書記頭目ヴァシリイ・ポヤールコフであった。彼は1643年に132名の頭目としてゼヤ河、シルカ河に派遣された。1645年、彼はオホーツク海に向かってアムール河を下る大胆な航行をやり遂げ、翌年にヤクーツクに戻った。17世紀半ばにダウリヤに襲いかかったのは、エロフェイ・ハバーロフの遠征隊であり、彼らによってアムール沿岸の《ささやかな耕地》が略奪されている。（同上：283）

ここでは登場人物に対する相反する価値評価がくだされている。一方でポヤールコフを「新しい土地」の「発見者」と位置づけながら、他方でハバーロフ遠征隊を「ダウリア」（ダウル人の地）の略奪の加害者として描いている。この対照的な叙述の背後に、プレオブラジェンスキイ本とは異なる価値観、すなわち国家の勤務者「書記頭目」による「発見」という行為とシベリアのレナ地方最大の富豪（ソ連極東史：29）と言われる民間人による「略奪」とを峻別する態度を読みとることができる。被害者側についての《ささやかな耕地》[землицы]という表現は、通常の「耕地」を指すземляの指小・愛称形であり、また「小麦、ライ麦・・・」といった具体的な作物を挙げて描かれている引用文前半を念頭におけば、ハバーロフ遠征隊の「略奪」の内実を想像することもできる。ただし添付地図はサハロフ本と同じである。

他の教科書では、アムール流域の農耕民についてここに引用した以上の情報は提供されていない。ロシア側の専門書によれば、「ダウル人」は自称を「ダフル」と言い、17世紀にアルガン流域とブレインスク山脈までのアムール上流域およびウムレカン河口からゼヤ下流域、すなわち現在のゼヤ-ブレヤ平野に暮らしていたツングース-満州系民族でモンゴル語を話していた人々の名称であるとされており、「チュチェル人」とは小興安嶺の北側から南方にかけてアムール、スナガリ/松花江、ウスリー流域に居住していた民族で、12世紀には契丹および金朝の支配下にあり、現在のナナイ人の様々な古称のひとつとされている（キリルロフ：134, 148；ソ連極東史：158-159）。また「ダウリヤ」「ダウルの地」と呼ばれるところは「ダウル人の王であるラフカイの所領」とされており、独自のローカルな支配構造が推測される（ソ連極東史：28-30）。ハバーロフ遠征隊の「略奪」については、ハバーロフのやり方をめぐって遠征隊内部で争いが

生じたり、十分な兵糧なくアムール沿岸に駐留を命じられたハバーロフの部下ステパーノフが食糧難から沿岸一帯の住民に対して掠奪行為を行った結果、清軍によって殲滅されたことなど複雑な出来事が指摘されている（ソ連極東史：31-32）。<sup>5)</sup>

それでは、これら歴史教科書で提示されている出来事は、ブラゴヴェシチェンスクの市誌ではどのように表象されているのだろうか？市長が編集長となって市制140周年を記念して一万部発行された『ブラゴヴェシチェンスク：写真物語』の歴史の頁から引用してみよう。

1644年夏、ゼヤ河を流下したB. Д. ポヤールコフの部隊がここ〔ゼヤとアムールの合流地点〕で夜営した。1653年、ハバーロフがまさにこの場所に砦町を築こうとするが、諸々の不利な事情により実現しなかった。1689年のネルチンスク条約締結後、ロシア人たちはアムール左岸域を放棄せざるを得なかった。（写真物語：42）

きわめて断片的であるとともに歴史的他者がまったく存在していない。パンフレット『アトラス』でも同様である。地元のアムール州郷土博物館の民族誌コーナーに展示されている「呪術師の衣装」や「先住民の住居」〈図14〉（博物館：8,11）の制作者たちや、考古学コーナーの「4～11世紀にアムール沿岸に居住していた〈モヘ〉[黒水鞅鞆]の民」（博物館：7）は市誌が提示する「歴史」表象の外に置かれているのである。それでは同じ出来事を今度は、中国の教科書で見て見よう。<sup>6)</sup>

人民教育出版社歴史室編著『九年義務教育三年制初級中学教科書：中国歴史：第三冊』（北京、人民教育出版社、1993年）〔以下、中国歴史〕では、「台湾収復とツァーリ・ロシア[沙俄]の黒龍江流域の侵略への抵抗反撃」という章のなかで、鄭成功による台湾からの外国人駆逐の物語と並立させて「アルバジン[雅克薩]戦と〈ネルチンスク[尼布楚]条約〉」の節が設けられ、イラスト5点、地図2点を含む全五頁にわたって詳述されている。そこでは「ツァーリ・ロシアの侵略者」が「この地のダフル[達斡爾]族」に対してツァーリへの「毛皮貢賦」を求めたのに対して、ダフル族が「我らは中国順治皇帝に進貢している」と回答したと直接話法で記述している。イラストとして「ハバーロフ侵略軍による黒龍江への侵擾」とともに「ツァーリ・ロシア侵略軍による中国人民の屠殺」「アルバジンの戦」〈図15〉が掲げられ各頁の三分の一ほどを占めている。「アルバジンの戦」での「反撃戦の形勢」をしめす地図には「ツァーリ・ロシア」の侵入路がバイカル湖とヤクーツクの二方面からアムール河、ゼヤ河沿いに下流に向かって示されている。他方、中国側は北上する陸軍と水軍がちょうど現ブラゴヴェシチェンスクで合流し上流のアルバジンに向かっていく。この戦は最終的には「侵略軍の過半が死傷し、さらに疫病が流行し、抵抗能力を完全に喪失した」と記述され、「外興安嶺より東にむかって海に至るまでを界と為す」と規定した「★条約規定」の一節が示され、「★〈尼布楚条約〉中俄国境界示意图」〈図16〉ではアルグン河-シルカ河-外興安嶺（スタノボイ山脈）から海まで国境線が引かれ、「烏第（ウダ）河」とその右岸域が「中ロネルチンスク条約待議地区」、すなわち未決定部分として示されている（11-12頁）。引用中の★印は教科書の中で学生が掌握しなければならない事項を指す記号である。

ここで「ネルチンスク条約」をめぐるいくつかの論点を提起したい。第一に、すでに明らかのように境界線認識のズレの問題である。第二に条約の呼称と暦の問題である。清施紹常『中俄國際約注』（台北、中華民國五十二年三月初版）は、この条約を縦書きで「康熙二十八年（西

一八六九年、俄八月廿七日}黒龍江界約六条」(33頁)と表示している。第三に条約内容の問題である。すなわち条約では「國界」の制定と並んで両国の「獵人等」が「越界」することを許さないとある点、従前より「我國所有のロシア人およびロシア所有の我國人」は旧の如く留めることとし、これ以後の「逃亡者」は即刻「送還」すること、また以後「往來文票を有す者」の「行旅」を許し「其貿易」を禁止しないと規定している(35-36頁)。したがってこの条約締結という出来事は、國家間の力関係の「条約」化と同時に、それまで両国に服属していなかったこの地域の民衆の自由往來の禁止と分割統治、そして官許の「貿易」の制度化を意味したのである。この点について国立編譯館・大學用書編審委員會編・吳相湘著『部定大學用書：俄帝侵略中國史』(台北，正中書局，中華民國四十三年；七十五年第十次印行)は、ネルチンスク条約により「現今のロシア領アムール州及び沿海州は，中国の土地」に「隸屬」したとその「榮光」を称えるとともに、中中間の「路票」による往來制限は、事實上「清廷」による「辺境民人往來貿易」の「局限」であったと指摘している(13頁)。

### 3.2.2 1858年のアイグン条約前後

ズィリヤノフ『ロシア史19世紀：普通学校第8学年用教科書』(1998年第2版)では、60～70年代のロシアの對外政策をあつかう章で「クリミア戦争後のロシアの國際的地位」につづいて「中央アジアの併合」に先立つ節「中国とのアイグン条約・ペキン条約」で、以下のように記述している。

19世紀半ばまでロシアは、極東において正確に画定された国境をもっていなかった。アムールとその支流ウスリー河流域の地は、ほとんど入植されていなかったし、またほとんど調査されていなかった。大きな學術的・政治的意義をもったのは、1849～1855年のアムール探査であった。1850年8月1日にГ.И.ネヴェリスコイは、アムール河口にロシアの旗を掲げた。アムール河およびウスリー河地区の非常に精密な地図が登場するやロシアと中国との国境画定問題が生じた。1858年、アイグン市で条約が調印され、中国はアムール左岸の地をロシア領として認め、ロシアはウスリーとの合流地点に至るまでのアムール右岸を中国領として認めた。ウスリーと海との間の地[今の沿海地方]は、両国の共有地として残された。1860年に北京でロシアと中国との間で新条約が締結され、最終的に国境が画定された。1860年6月20日にゾトイ・ログ湾岸にウラジオストクが建設された。こうしてエルマークが着手しE.ハバーロフやその他のロシア人探検家たちが引き継いだ偉大な事業が完結したのである。(ズィリヤノフ：153-154)

東シベリア総督ムラヴィヨフに言及することなく、むしろエルマークやハバーロフに代表されるコサックや民間商人のイニシアティブによる探査事業が、「地図」作成という學術的であり同時に政治的意義をもつ出来事と結びつき、最終的に國家間条約として結実したことを「偉大な」こととして評価している。ちなみに海軍将校ネヴェリスコイの探査は「政府の公式の裁可なしに」挙行されたものであった(ソ連極東史：195)が、彼の行為は皇帝によって追認され1897年に彼の顕彰碑がウラジオストクに建立された。

ブガノフ、ズィリヤノフ『17世紀末～19世紀ロシア史：普通学校第10学年用教科書』(1998年第4版)は、前述のサハロフの教科書の続編である。「60～70年代のロシアの對外政策」の節で次のように記している。「中国とのアイグン条約とペキン条約 19世紀半ばまでロシアは極東に

おいて公式に承認した国境をもっていなかった。アムール沿岸とその支流ウスリー沿岸の土地はほとんど入植されておらず、またほとんど調査されていなかった。多大な学術的・政治的意義をもったのは、1849～1855年のアムール探検であった。1850年8月1日にГ. И. ネヴェリスコイがアムール河口にロシアの旗を立てた。ロシア政府が、アムール河とウスリー河流域の非常に精密な地図を得た時、ロシアと中国との国境画定問題が浮上した。1858年にアイグン市で条約が調印され、これにより中国はアムール左岸の土地をロシア領として認め、ロシアは、ウスリー河との合流地点までのアムール右岸を中国領として認めた。ウスリー河と海との間の土地は一時的に両国の共有地として残された。」(ブガノフ：239)ここでの記述には、ズィリャノフ本と比べ「偉大な」といった評価は見られないが、未踏の地の調査探検、国旗掲揚、地図作成という行為を重要な政治的行為であると強調している。

パヴレンコ、リャシェンコ、トヴァルドフスカヤ『17世紀末-19世紀ロシア：普通学校第10学年用教科書』(1997年第2版)は、ピョートル大帝からアレクサンドル3世統治時代を扱うなかで「1877～1878年露土戦争」「中央アジアの併合」に続いて「中国および日本との条約」の節のなかで次のように記述している。「改革[1861年の農奴解放を含む一連の制度改革]後のロシア外交の経験は、領土の分割・再編という複雑な問題は平和的な方法でも解決可能なことを示している。国境画定問題での中国と日本との交渉は成功裏におこなわれた。1860年のペキン条約でウスリー地方(ウスリー河と海洋との間の領域)がロシアのものとなった。そこは1658年[1858年の誤植]アイグン条約によってロシアと中国の共有地とされていたところであった。1860年にここに帝国の艦隊基地としてウラジオストクが築かれ、それは後にこの地方の行政中心地となった。」(パヴレンコ、リャシェンコ：312)

この教科書は個々の人物の名を挙げていない。むしろトルコや中央アジアでの軍事的解決法と対比させるかたちで中国や日本との国境問題解決の「平和的方法」を強調している点の特徴である。だがその具体的内実は伝えられていない。

旧マルクス・レーニン主義研究所で、現在のロシア社会民族問題独立研究所のシェロハエフ編集『ロシア史：1861～1917年：中等学校用実験的学習参考書』(1996年)は他の教科書にはない視点を提示している。「ツァーリズムの民族政策」と「19世紀のシベリアと極東の開拓」の項目での次のような記述である。

「ロシアの支配層は大国主義原理にもとづく政策を打ち立てた。ロシア語は国語であり、ロシア正教は支配宗教であった。官製イデオロギーは、ウクライナ人やベラルーシ人もロシア人[русские]だとみなした。《土着民》《異族人》への寛大で庇護者の態度または侮蔑的態度が植えつけられた。大国主義的政策によりポーランドの《ロシア人化[обрусение]》が進行し、フィンランドの自治の解体が進められた。」(シェロハエフ：173-174)

「シベリアと極東の開拓は、新しい自然条件に既存の農耕文化と経済的生活様式全体を順応させる必要性、大きな分散性の克服、ツァーリの行政機関からの十分な支援がないまま果てしない空間を《住み馴れたものにする》の困難さとむすびついていた。シベリアの経済と文化の発展において本質的な役割を果たしたのは、流刑者・強制入植者たち(19世紀全体で家族も含め100万人以上)であった。しかしながら新天地のロシア人住民の大部分を占めていたのは中央ロシア諸県出身の移民者たちだった。他の移民集団と比べより恵まれていたのは、コサックたちであった(19世紀にはシベリア、ザバイカル、アムール、ウスリーの各コサック軍が編成された)。[...]1880～90年代にはシベリアと極東で特に積極的に入植が進められた。先進的な

経済運営方法の借用によって古来よりシベリアに居住してきた諸民族の発展に有利な条件が創り出された。彼らの人口は、18世紀末から19世紀末にかけて36万3000人から82万2000人に増加した。」(同上：176)

この実験的参考書は、支配層の「官製イデオロギー」を明確に描き出すなかで、「ロシア人」として一括されてきた人々を区別し、このイデオロギーの「《土着民》《異族人》」への差別的な姿勢を暴露している。他の教科書では均質なプロセスとして描かれる「開拓」の担い手たちは、異なる条件下にあった「流刑者・強制入植者」「中央ロシア諸県出身の移民者」「コサック」へと区別されている。ところが極東方面になるとこのような分析的視点は曖昧になり、「先進的な経済運営」が前面に出てくるように見える。そしてシベリアの諸民族の文化発展に寄与した人々として「ロシアの文化人、社会運動家、政治流刑囚たち」の具体的な名前が挙げられることになる(同上：177)。ここで提起されているのは国家の大国主義的政策と「開拓」を具体的に担った人々の歴史的文化的意義とを区別して論じようとする姿勢であるといえる。後者の面で「先進的な経済運営」は「《土着民》《異族人》」と呼ばれた人々に肯定的な影響を及ぼしたかのよう

に描かれている。この点に関して、ブラゴヴェシチェンスク国立医科アカデミーのスコルボヴィチの学会報告は、極東での天然痘流行の感染源の一つが西方からの移住者であることを指摘した上で、1856年末に「ギリヤーク人」の間で流行し、1857年間にアムール下流域で「ギリヤーク人」の人口の20%が死亡し、一管区の先住民が全滅したり一村落全体が放棄されるといった事例を断片的ながら紹介し、「極東地方には1922年まで「非ロシア人[нерусское]住民に奉仕するような医療機関は存在しなかった」と述べている(スコルボヴィチ：30)。また1916年に至っても「科学的医学を身につけた人がいないため、異族人たちは漢方医や日本医の診療に頼っているが、病に罹った異族人たちはますます頻繁に呪術師の助けを乞うようになっている」という同時代の疫学者の報告を引いている(同上：32)。「ギリヤーク人」とは19世紀のアムール流域の先住民についてのロシア側の他称である。参考に掲げた《図17》は「ギリヤーク人」として撮影されたものである(写真集：139)。また人口統計も「調査された」数のことであり必ずしも実数を表さない点に注意する必要がある。

つづいてこの時代に関するブラゴヴェシチェンスクでのローカルな表象を検討したい。既述の『写真物語』では、アイグン条約にいたる過程を極めて微細にわたって叙述している。

「1856年、[...]トラヴィン中尉指揮下の50名ほどのザバイカル・コサックが、ここ[ゼヤ河口から約4～5キロほどアムール上流の地点]まで丸太を組んだ筏で食料を運び、食料庫として木造家屋を建て、自らは半地下式塹壕小屋[ゼムリヤンカ]に住んだ。しかし越冬は厳しく29名が壊血病その他で死亡した。遺体は、[地面が凍結して]穴が掘れないので木造家屋に安置した。」(写真物語：42)

これが、ブラゴヴェシチェンスクの前身となる「ウスチ・ゼイスカヤ」コサック兵村の前史である。彼らは、筏用の丸太と穀物中心の食糧だけを与えられて、1月の平均最低気温が零下24度以下で10月下旬から4月中旬まで氷結するアムール河畔の「ゼムリヤンカ」に籠もって春を待ったのであろう。ゼムリヤンカとは、竪穴を掘って柱を建て、そこに立て掛けるようにして片屋根または切妻式に屋根を覆ったものである。彼らがそこに居たのは「アムール下流域との文書使連絡網の保安と維持」(同上：42)のためであったという。翌年の夏には、「家族連れ

筏で流下してくる。この大隊の隊長は「以前に南ウクライナに勤務していたヤコヴ・ヴァシリエヴィチ・チャチェンコであった。彼の発意と指揮により兵士用の塹壕小屋と、コサックの家族用に土壁小屋[マーザンカ]が建てられた。土壁小屋とは柳の枝で造られるもので二重の壁の中に土が盛られ壁には泥が塗られた。しかし暖冬のウクライナに適応したこの土壁小屋は、アムールの厳冬には不向きであることが明らかになった。壁にはヒビが入り隙間から土がこぼれ落ち屋内に烈風が吹き込んだ。」このコサック集団とともにやってきたが「最初の聖職者アレクサンドル・ポリカルポヴィチ・シゾイ（シゾイ神父）」であり、彼は遺体安置所となっていた木造家屋を解体して約3キロ下流の丘の上に最初の教会を建てる。1858年夏には、新たな筏隊が到着しこの兵村には正規軍6個中隊、軽砲兵1個大隊、コサック移住者1個中隊が駐屯するまでにいたる。教会の立つ「丘にいたる未来の町の場所には、40の土壁小屋と20以上の塹壕小屋が建てられた。教会以外の木造家屋は、部隊長宅だけであった。食糧は不足気味で塹壕小屋は湿気が多く冷たかったし、土壁小屋は非常に寒かった。壊血病と感冒で大人やとりわけ子ども達が亡くなった。アムール沿岸地方の荒野でロシアの民[россияне]が生き延びることは並大抵のことではなかった。」(同上：42)

ここでは塹壕小屋、土壁小屋、木造家屋といった住居の種類について詳細に記述している。この分類は、そのままそこに住む人々の身分秩序に対応している。コサックと正規軍はたんに駐屯しただけでなく家族と信仰と生活様式をセットにした一つの文化的価値体系とともにこの地にやって来て死んでいったことが描かれている。彼らを「ロシア人 русские」と総称するのではなく、「ロシアの民 россияне」と表現している理由は明白である。彼らはウクライナ文化の担い手であり、そのために厳冬の地で多くの犠牲を払うことになったと見なされているからである。参考に掲げた《図18》は「アムール河岸におけるウクライナ出身の移住者」と題する女性と子ども達の写真である(写真集：210-211)。

しかしこの犠牲は、1858年5月5日の「ムラヴィヨフ総督」と「カムチャツカ・クリル・アレウト大主教イノケンチイ・ヴェニアミノフ」<sup>7)</sup>の到着とともにモスクワ-ペテルブルグ中心の「ロシア史」と結びつけられ、「我々」という擬制的アイデンティティを介して報われるかのようなイメージが描かれる。そこから「ブラゴヴェシチェンスク」という名前をとともなう歴史が記述されることになる。

条約調印が予定されていたアイグンへの出発前夜の5月9日、イノケンチイ大主教はムラヴィヨフの列席のもとで生神女受胎告知(ブラゴヴェシチェニエ)教会を開基した。[…] 1858年5月16日(西暦28日)にアイグン条約が締結された。[…] 5月17日(西暦29日)、ムラヴィヨフは、ウスチ・ゼイスカヤ兵村に戻り、そこでイノケンチイ大主教は感謝の祈禱を捧げた。翌日には十字架行進がおこなわれた。総督は、アムール問題の解決という偉大な事業への参加者たちへの感謝の言葉を述べた告辞を宣布した。その中には次のような特筆すべき言葉があった。《我々の労苦は無駄ではなかった。アムールはロシアの財産となったのである。聖なる正教会は諸君たちのために祈っている。ロシアは感謝しているのだ!》[…] 7月5日(西暦17日)、ブラゴヴェシチェンスク市設置の勅令が続いた。これが市の誕生の公式の日付となった。(写真物語：43)

これ以降、ブラゴヴェシチェンスクは、58年12月に勅令によるアムール州設置とともにその州都となり、ヤクーツクにあった大主教座をこの地に移すイノケンチイの提議が皇帝より裁可



され、1859年に初代アムール州軍務知事が赴任する等々の都市形成の物語が描かれる（同上：43-45）。都市建設の叙述の中に挿入されているのが、全国的に著名な人々の訪問・滞在の記録（バクーニン、ピョートル・クロポトキン、チャーホフ、皇太子ニコライ）である。

《図19》は、ブラゴヴェシチェンスクの絵葉書セットの表紙である。上の写真は船上から見た市の中心部（レーニン広場と市庁舎）である。この広場の河岸寄りにあるのが下の写真にある市制・州制施行記念モニュメントである。背後にあるアムール河から北岸に上陸する形で据え付けられた舟形の像が、この町の起源の外来性を象徴的に物語っている。

元聖職者でブラゴヴェシチェンスクの学校教師キリルロフによる『アムール・沿海州周辺地理統計辞典』は、都市の名称に関して興味深いエピソードを伝えている。「当初、新しい町は、この地方の先住民の言葉で《黒い河》を意味するアムールに因んだチェルノレーツク（ロシア語で黒い河の意）、またはロシエスラヴォ（ロシアの栄光）と呼ばれる予定であった」（キリルロフ：75）。またモスクワのダニイロフ修道院の出版所が出した本によれば、「ゼイムール」（ゼヤとアムールの合名）、「ゼイグラド」「ゼイゴロド」（ゼヤ河の町）などが考えられたが、ムラヴィヨフが「聖イノケンチイが聖職を始められた遠きイルクーツクの聖堂を記念して、ブラゴヴェシチェンスクとすべきだ」と主張したと言う（イノケンチイの旅：134）。

さて中国ではこの条約締結という出来事をどのように描いているのだろうか。既述の人民教育出版社『中国歴史』は「中国近代史部分」として「中英阿片戦争」、「太平天国運動」につづき「第二次阿片戦争」のなかで「ツァーリ・ロシア侵占中国大片領土」という見出しのもとで第二次阿片戦争の前後に「米ロ両国が火事場泥棒をはたらいた[趁火打劫]」と述べ、「ツァーリ・ロシア」は「清政府」を「強迫」し「不平等条約」をおしつけ「中国東北和北西領土150多万平方公里（キロ）」を「割占」したと表現している。さらに「ツァーリ・ロシア」による「不平等条約割占中国北方領土表」として4つの不平等条約をあげ、その最初に1858年「中ロ《愛琿条約》」で「中国東北外興安嶺以南、黒龍江以北」を「割占」された範囲として記すとともに「★沙俄侵占中国北方領土示意図」でもネルチンスク条約で「待議地区」とされた烏第河右岸域を含む外興安嶺以南が1858年に「割占」された「中国領土」として図示し、現ブラゴヴェシチェンスクの位置には「海蘭泡」という都市名が記されている（62-63頁）。人民教育出版社歴史室編著『高級中学課本：中国近現代史：上冊（必修）』（人民教育出版社、1993年）も「愛琿条約」について「★沙俄侵吞我国北方領土示意図」《図20》を挙げている点では同じであるが、中国名の都市は記されていない（16頁）。また『九年制義務教育課本：歴史（試用本）八年級第一学期』（上海教育出版社、1992年）も「愛琿条約」を「ツァーリ・ロシア」が「火事場泥棒をはたらいた[火乘打劫]」と表現しているものの人民教育出版社本と異なり、「沙俄侵占中国北方領土示意図」に★印がつけられていない（15頁）。同じ上海の『高級中学課本：歴史（試用本）一年級』（上海教育出版社、1995年）は、「19世紀ツァーリ・ロシア国の侵略拡張」という見出しで、ロシア帝国がクリミア[克里木]戦争以降、地中海への出口を喪失したことに関連させながら「第二次阿片戦争」に乗じて中国領土を「侵占」したと指摘しているが、具体的な条約名を挙げることなく、シベリア人、キルギス人、ウィグル人、トルクメニスタン人の「居住地区」への「侵略拡張」の結果、「大帝国」と同時に「多民族の大監獄」が成立したと述べており（123頁）、他の教科書と異なった視点をもっている。

呉湘湘『部定大學用書：俄帝侵略中國史』は、クリミア戦争と英ロ対立に言及する中で、ムラヴィヨフが対英戦略として黒龍江を先取すべきと主張したこと、そして当時の「中国人の反英

的心理」を利用しようとしたこと、そして北京の清廷への公使としてプチャーチンが任命され、ムラビヨフと連携をとって交渉を進めたことなどを描いている。その中で「英夷」を「再防」するため「空曠之地」である「海蘭泡」を「我国（ロシア）」に「給与」すれば中国の「利益となろう」と彼らの要求が表現されている。また条約の内容として国境画定とともに、黒龍江と烏蘇里（ウスリー）江の両江の航行権は中ロ両国に属し、他国船隻の航行の排除がうたわれ、ロシア側の費用で左岸の旧居民を右岸に移すことなどが定められたという（34-39頁）。

### 3.2.3 1900年の「義和団運動」前後

ダニロフ、コスリナ『ロシア史。20世紀：普通学校第9学年用教科書』（1998年第4版）は、20世紀初頭をロシア的「近代化」の挫折の時期と位置づけ、第1章「偉大なプロセスのエピローグ：1900-1917年のロシア」のなかでニコライ2世の対外政策について次のように記述している。「《極東のゲーム》 極東でロシアが優位に立つことを妨げていた主たる障害は日本であった。日本は《偉大な日本》を建設する綱領を掲げ積極的にそれを実現し始めた。1894年に日本人は中国と朝鮮への侵略行動を開始し中国に過酷な講和条件を押しつけ朝鮮を衛星国にした。ロシアはヨーロッパ諸国による統一的な反日ブロックの形成を主導した。1895年に独仏の支持を受け日本に最後通告をおこない、いくつかの要求を撤回させた。同時にヨーロッパ列強と合衆国は急速に日本に倣って中国領の重要地点（英は香港、独は青島、ロシアはポルト・アルトゥール〔旅順港〕）を〔中国の利益を日本から守ってやったという〕《援護》への《謝礼》として租借した。」（ダニロフ：58）

レヴァドフスキイ、シチエチノフ『20世紀のロシア：第10-11学年用教科書』（1998年第2版）は、当初、ロシアはC. Ю. ヴィツェ主唱の「非常に慎重で抑制した」極東政策をおこなっていたが、日清戦争後に「日本が強盗のような講和条約を中国に押しつけた」時、ロシアはその見直しを要求するとともに「中国と防衛同盟を結び」、 「中国東方鉄道（東清鉄道）」の敷設権を手に入れたと述べ、ヴィツェはそのような「後見・庇護策によってこの国の全土を徐々に手に入れることができる」と考えていたが、ヨーロッパ列強と日本、合衆国も次々と不平等条約を押しつけ積極的に中国に浸透していったので、ロシアもそれに遅れまいと急ぎ1898年に中国から「不凍港ポルト・アルトゥール」を海軍基地設置権つきで租借したという。ところが「満州と朝鮮の天然資源収奪のための株式会社」と結びついた宮廷内の「闇の勢力」がロシアの「対外政策の先鋭化」を押し進めた結果、日露戦争に至ったと述べている（レヴァドフスキイ：27-28）。この教科書は、目的は同じだが手段の面で立場を異にする政府内の政治グループを区別している。だがダニロフ本と同様に、この時代のアムール沿岸地方の具体的な出来事は大国間のゲームの中に塗り込められてしまっている。

ソロコーチュブ編『20世紀の世界：第11学年用教科書』（1998年第2版）は、欧米だけでなくアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにも均等に紙面を割いている現代世界史の教科書である。「19世紀末～20世紀初頭のアジア・アフリカ」の章で「アジアの覚醒：伝統主義と近代化」の節に続いて中国、日本、インドをとりあげている。とりわけ中国の項では、清仏戦争、日清戦争での敗北と領土喪失、立憲君主主義的なブルジョワ民族運動としての康有為の変法運動と、孫逸仙らの革命的民主主義的民族解放運動に言及し、「義和団〔イヘトゥアン〕（《正義と平和の部隊》の意）の指導下の民衆蜂起」が「八列強：イギリス、アメリカ合衆国、ロシア、日本、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア＝ハンガリーの軍隊」によって「残忍に鎮圧され

た」と記述している。だが「満州」をめぐる自国史との接点は見あたらない（ソロコーチュプ：47-48）。

実験的参考書シェロハエフ『ロシア史：1861～1917年：中等学校用実験的学習参考書』でも国際関係論的叙述に終始している。「日清戦争で勝利した日本はアジアの主導的国家となった。朝鮮・満州へのイギリス、日本、合衆国の進出はロシアによる極東の経済開発と政治統合を強化させた。1891年、チェリャビンスクからウラジオストクまでの7,000キロ以上のシベリア横断鉄道の建設がはじまった。1896年の口清条約、東清鉄道の建設、1896年の旅順港と遼東半島の軍事基地設置権をともなう租借はロ日対立を激化させ20世紀初頭のロ日戦争を招いた。」（シェロハエフ：170）

いずれの教科書類にも共通する特徴は、東アジアでの列強中心の国際関係のなかでロシアが受け身の対応を強いられたような描き方をしている点である。

それでは、ローカルな市誌ではこの時代をどのように提示しているのか見てみよう。それはゼヤ金鉱の採掘、農業、運輸業を中心とする経済発展の時代、「国際商社」と「銀行業」の繁栄の時代、いかえれば極東版ゴールド・ラッシュの時代であった（写真物語：45）。「ブラゴヴェシチェンスクには、企業家や金鉱採掘業者たちの莫大な利潤が蓄積し、ここで巨額の商取引が交わされた。労働者や商社員たちがここから州全体へと派遣された。ここには成功した採金師たちが夏期の労働を終え、決して楽とは言えない労働の成果を換金するために舞い戻ってきた。彼らのために数十の商店や娯楽施設があった。」（同上）

また《図19》（絵葉書へいへ）にある「カトリック教会堂」は金採鉱にともないドイツ系の資本と文化（あるいはポーランド文化）がこの地に入ってきたことを暗示するものであるが、市誌『写真物語』では言及されていない。

この世紀間の時代に起きたアムール沿岸の町での出来事について、中国の教科書での記述は次の通りである。人民教育出版社『中国歴史』の「義和団運動の興起」と「反対八国聯軍侵略的闘争」についての章では、北京中心の叙述の末尾で次のように記述している。まさに「八国聯軍」が天津に進行した時、「ツァーリ・ロシア」は大規模な軍隊警察を出動させ「海蘭泡①に居住する中国居民」を逮捕し黒龍江の河岸まで連行し、その途上で少なからぬ人を「殺死」させ、残りの「幾千人」を黒龍江の怒濤の中に追い込んだと述べ、これを「海蘭泡大屠殺惨案」と表現している。「海蘭泡」の注①には「現ロシア・ブラゴヴェシチェンスクのこと」と明記している。さらに1900年7月中旬に帝政ロシア軍隊が「歴来、中国の管轄に属していた」黒龍江左岸の「江東六十四屯」の「1万人以上の中国居民」を略奪し、「7000人以上の中国居民」を「惨死」させたと強調字体で記述している。また「練習問題」として「海蘭泡惨案」を行った者について質問し正答を「A.英国軍人、B.日本軍人、C.帝政ロシア軍人、D.ドイツ国軍人」の中から選ばせている（118頁）。

他方、『高級中学課本：中国近現代史：上冊（必修）』は「八国組成侵略聯軍」の様子として北京市街にバリケードを築くロシア軍のイラストが挿入されているだけで北京中心の叙述である（71頁）。上海の『九年制義務教育課本：歴史（試用本）八年級第一学期』も北京中心の叙述で「海蘭泡」への言及はない（58頁）。呉相湘『部定大學用書：俄帝侵略中國史』は、「拳匪の亂とロシア兵の東三省への進入占領」という章のなかで、ロシア軍の「東三省」（黒龍江、吉林、遼寧）への進攻ラインを5つ挙げ、その中の一つとして「海蘭泡（Blagovschensk）」から黒龍江を渡り「愛琿」を攻め、「興安嶺」の東を越え、「斎斎哈爾」（チチハル）に向かうラインを挙

げている。またアムール州総督の宣布文として「江東六十四屯及黒龍江右岸、凡俄軍占領之地、統歸俄国政府治理、土地併併俄国」と引用している。ちなみに、他のラインは、東省鉄路（東清鉄道）を南下するルート、伯力（ハバロフスク）から松花江を経て哈爾濱（ハルビン）へ向かうルート、海參威（ウラジオストク）から琿春を経て吉林へ向かうルート、旅順から奉天を経て瀋陽に向かうルートである。「黒龍江將軍壽山」の「自殺殉職」には言及しているが「海蘭泡」や人民への言及はない（191頁）。ちなみに『写真物語』に掲げられている古写真〈図22〉には「中国系労働者」たちの姿が写っているが、本文では彼らについて言及していない（写真物語：53）。<sup>9)</sup>

#### 4. むすびにかえて

以上の分析の中で明らかになったナショナルな表象とローカルな表象とのズレは次の通りである。ロシア連邦の全国標準的な地理・歴史教科書は、極東・アムール沿岸地方を「ロシア人」による「発見・調査・開拓」の過程に包摂したうえで「ロシア」の時空間的一体性を前提にした地政学的・国際関係論的視点からの歴史表象が支配的であり、現代に関しては特定の発展段階論の観点から農業・観光産業中心の「低開発地域」というイメージを提示している。歴史的他者に関しては「支配者」と「民衆」とを区別するとともに地域の先住民への言及が微かにある。他方、ローカルな公的な表象では、商工業の中心地、国際貿易の拠点、魅力的な観光地という都市の個性が強調され、よりミクロな視点での歴史叙述がなされているものの、地域に関わりをもった国政および宗教上の「偉人」の顕彰を介して地域史と国家史とが結びつけられている。また教科書との相違として「ロシア人」以外の人々を含む「ロシアの民」という歴史的アイデンティティの表出、「ロシア正教会」の役割の重視、明確な歴史的・文化的な他者表象の不在を指摘することができる。中華人民共和国の歴史教科書では、首都を中心にした国際関係論の視点からの歴史表象が支配的であるが、「侵略者」とされる他者をもつばら「ツァーリ・ロシア」と表記している。アムール沿岸の先住民（ダフル族）や「海蘭泡」（ブラゴヴェシチェンスク）の「中国居民」を「中国史」の枠組みの中に包摂している記述もあるが、出版地を異にする教科書のあいだでニュアンスの差もある。このようなナショナル・ローカル・インターナショナルな次元での表象間のズレは、地名と暦に見られる異なる時空間秩序体系と、歴史叙述を支配する異なる価値体系に起因しており、その背後には《我々》と《彼ら》との二項対置の図式に基づくアイデンティティ・ポリティクスを読みとることもできる。同時に、ナショナルないしローカルな集合的アイデンティティによって均質化されている歴史表象の相互のズレに注目する時、公式の表象から排除されている存在も見えてくる。実践的な歴史教育においては、これら公式に表象されざる存在に一層注目する必要があるだろう<sup>9)</sup>。本稿はローカルなものとナショナルなものを中心に教科書での表象を分析したが、今後、様々な時間・場所・出来事・主体などに焦点をおいた様々なメディアでの表象分析も行われるべきであろう。

図版一覧

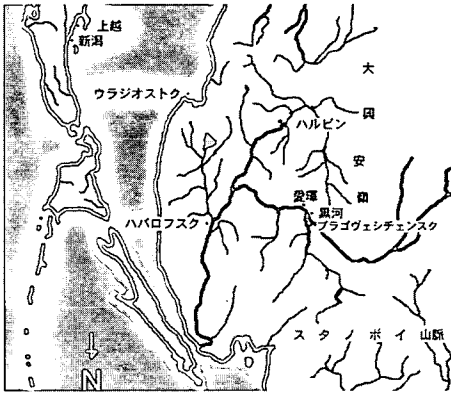


図1 極東河川図と主要都市 (筆者作成)



図2 ロシア極東都市の人口規模図

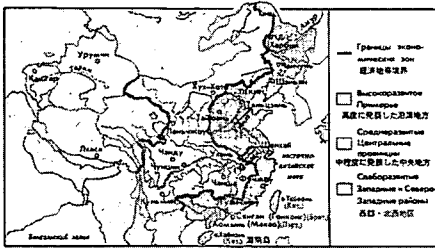


図3 中国の経済地帯区分 (世界地理教科書)



図4 黒河市への連絡船とアムール河



図5 パンと塩で歓迎

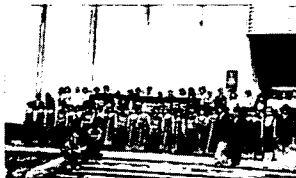


図6 中国の子どもたちの歓迎会



図7 中ロの子どもの共演



図8 対ロ文化交流の繁栄・左下に「洋嫁」

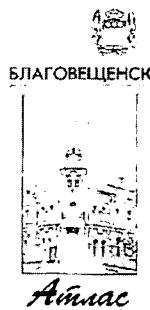


図9 「アムラス」表紙

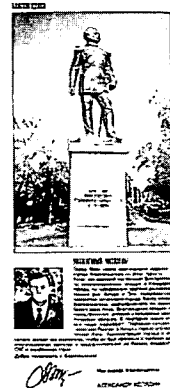


図10 ムラヴィヨフ像



図11 市章

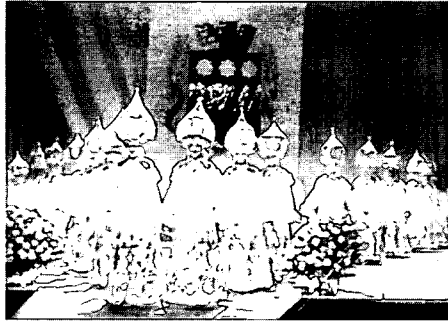


図12 記念式典での舞踏組曲の一部



図13 サハロフ本の歴史地図

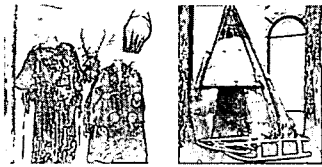


図14 呪術師の衣装と復元住居



図15 中国人民を虐殺する侵略軍 (左) アルバジン戦 (右)

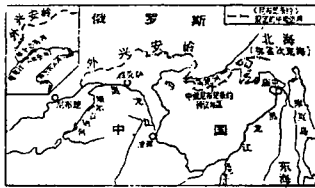


図16 ネルチンスク条約図

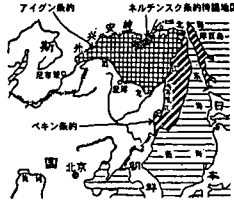


図20 不平等条約図 (部分)



図21



図19 絵葉書の記念碑



図17 「ギリヤーク人」の写真



図18 「アムール河岸のウクライナ移民」の写真



図22 「写真物語」に掲載されている「中国系労働者」の姿

## 註

- 1) 日本語で「ロシア的」という場合の二種類のロシア語、*российский* [ロッシースキイ] と *русский* [ルースキイ] の区別の重要性については浅倉有子・下里俊行「国際学術会議『世界史の文脈における極東：過去から未来へ』に参加して」(『歴史学研究』第696号, 1997年4月)で指摘されているが、Thompson, Ewa M, *Imperial Knowledge: Russian Literature and Colonialism*. (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 2000. pp.16-18) でもこの二つの形容詞が *russian* と一括されてしまう問題を指摘している。1997年度科研費研究の一環として実施されたロシア連邦極東在住の歴史研究者・歴史教育者へのアンケート調査(ロシア科学アカデミー極東支部・歴史研究所・実施)の結果、歴史教育における1) 教科内容のヨーロッパ・ロシア中心の現状, 2) 個々の研究者・教師の欧米文化への心理的親近感, 3) 文明の体現者であるロシア人による「開発・開拓・拓殖・自己化」[освоение]の過程としての極東史認識が明らかになった。例えば極端な例として「ロシア人たちが [русские] が極東にやってきて、極東を開拓したのはロシア人であり、極東に入植したのはロシア人であり、極東はロシア人の土地である。すべての外国人と非ロシア人は、ロシア極東の経済・政治的發展の見地からみて否定的な現象である。とはいえ土着民たち [аборигены] にはこのことは当てはまらない。彼らは未開の弟たち [младшие дикие братья] だからである。」[回答者：研究所研究員・大学講師, 中世中国史専攻, 30-40歳代の男性]といった回答も見られた。このような歴史意識は、ソ連時代の歴史教育の次元とともにソ連崩壊以降、急速にグローバリゼーションの渦中に巻き込まれている人々のアイデンティティ危機の次元でも検討を要する問題であろう。とはいえこのような歴史認識は、アジア地域において様々な歴史的背景をもって存在する人々の共存に対して否定的に作用するものであることは疑いない。カルパナ・サーヘニー(袴田茂樹監修・松井秀和訳)『ロシアのオリエンタリズム：民族迫害の思想と歴史』(柏書房, 2000年)が提示した「ロシア」的「オリエンタリズム」の言説の分析は、この否定的作用に対する強烈的な反作用の一例であろう。
- 2) この地域に関する最近の様々な関心の所在を示す研究としては次のものがある。左近毅「石光真清の手記に見る日露交流一戦争・革命・国家のはざま」(奥村剋三・左近毅編『ロシア文化と近代日本』世界思想社, 1998年); 大沼盛男ほか編『ロシア極東の農業改革』(御茶の水書房, 2000年); 岩下明裕「極東ロシアから見た中国」(『山口県立大学国際文化学部紀要』第3号, 1997年); 佐藤洋一「帝政期のウラジオストク中心市街地における都市空間の形成に関する歴史的研究」(博士論文, 早稲田大学, 2000年); M. Bassin, *Imperial Visions: Nationalist Imagination and Geographical Expansion in the Russian Far East, 1840-1865*. Cambridge UP, 1999. またブラゴヴェシチェンスクで「ロシア革命」を目撃した石光真清(いしみつまさよ)の手記四部作を原作にしたドラマが1998年5月にNHK衛星第二放送で「石光真清の生涯」全4部として放送された。とりわけBassinの著作は19世紀半ばのアムール沿岸地域についてのイメージとナショナルな意識との関連を社会思想と地理学研究との結びつきを中心に解明した先駆的な研究である。なお、歴史教育という視点からアムール沿岸地域を論じた先行研究は管見の限りでは不在である。同市の画像は <http://www2h.biglobe.ne.jp/~SEIBUN/essay/essay19.html> を参照。日露戦争およびシ

ベリア干渉戦争前後の時代にはこの地域に関する膨大な日本語文献がある。現在、日本海沿岸地域の自治体交流の一環としてこの地域への関心が再び高まっているが、二国間関係の枠に取まらないこの地域の複雑な歴史過程への複眼的アプローチが求められている。

- 3) ロシアの地理教科書で用いられる「地域」には二種類の用語がある。一つは専ら国政上の情報管理の単位としての一国内の各領域を指す район と、もう一つは地球規模での様々な指標によって区分された複数の国を含む幅広い領域を指す регион である (アレクセエフ: 183, 117)。いずれの「地域」区分も現行の国境区分を前提にしている。
- 4) 黒河市周辺の主な観光地として「オロチョン族民族風情区」「愛輝古城」と孫呉市の「日本侵華軍事遺址」が紹介されている (10頁)。後者として「侵華日軍731部隊罪証陳列館」「731部隊孫呉支部跡」が知られている。 <http://www.threeweb.ad.jp/~suopei>
- 5) ネルチンスク条約について『ソ連極東史』は概ね次のように説明している。当時のロシア帝国の統治者は、イワン5世とピョートル1世の両幼帝の摂政ソフィアであった。彼女は、1686年に西部国境に関してポーランドと和平を結んだ後、87年に南方のクリミア汗国への遠征を開始したが結局は89年に失敗に終わった。1688年から開始された清との国境交渉は、地域の当事者であるモンゴル諸族との駆け引きや清とロシア双方の軍事的示威行動、清側に随行したフランス人とポルトガル人のイエズス会士や交渉言語として用いられたラテン語の要因など複雑なプロセスのなかでおこなわれていた。当初、ロシア側は、アムール河を国境線とすることを要求し、清側はアムール沿岸地方およびザイバイカル地方を要求していた。ところが摂政ソフィアは条約締結を急がせ、結局はネルチンスクとアルバジン要塞の中間のゴルビツァ河に国境を引き、アルグン河以西はロシア側とし、ゼヤ河以東からオホーツク海に注ぐウダ河流域は未決定とすることで決着がついた (87-90頁)。「アムール」の語源問題は本稿の課題の範囲外であるが、参考までにキリルロフ『アムール・沿海州周辺地理統計辞典』の「アムール」の項目を紹介しておきたい。「中国人には、ヘイルンチャン [黒龍江] の名で知られている。満州人にはサハリン・ウラ、モンゴル人にはハラ・ムウレン、ツングース人にはシルカル、シルカルとして、オリチ人、ゴリド人、ネギダル人には、それぞれマングウ、マムグウ、マムウ、ギリヤーク人にはラー、またはラー・エッリとして知られている。ロシア語の名称の起源に関しては様々な謎解きがある。一説にはこれをエムール、ないしエムーリ起源とするものである (アルバジハ)。彼女の推測によれば、その名称を知らずにアムール水系を発見した人々は、最初のロシア人村が造られた場所の対岸に流れ込んでいた小さな支流に因んでこう名付けたのである。別の説は、モンゴル語のハラ・ムウレンに起源するとするもので、それはアムール上流のみを指していた。第三の説は、ツングース語の言葉、アムール、すなわち《善き世界!》に起源するという説で、それはまるでアムール河への最初のロシア人の進出を歓迎しているかのようである。第四の説は、マムウという言葉に起源するというもので、その言葉でオリチ人、ゴリド人、ネギダル人たちはアムール下流を意味していた。最後の解釈が信頼できそうである。なぜならアムール地方の最初のロシア人旅行家ポヤールコフがアムールと呼んでいるのはウスリー河口下流の部分だけであり、そこで彼はゴリド人と遭遇しているからであり、同様に《マムール》河についての最初の情報を伝えたトムスクのコサックたちも、この名をネギダル人たちと交流関係をもっていたウデヘ系ツングース人たちから聞いたからである」 (48-49頁)。「アムールという河川名はロシアの地理ひいては世界地理に贈られたツングース諸民族のプレゼントなのである」というロシアの E.M. ムルザーエフ博士の論文の久野公訳は <http://www2h.biglobe.ne.jp/~SEIBUN/essay/essaytkuno.html> で公開されてい



る。アムール流域の先住民に関して膨大な専門研究があるが本稿では立ち入らない。18世紀の同時代の地域認識として帝国科学アカデミーの歴史家ミルレル（ミュラー）は「アムール河・アルグン河沿岸に暮らし、中国人の権力下にあるダウル人や満州人たち」について「中国の史書はつねに東のタタールと呼んでおり […] 長城の外側や国境付近に暮らしていた諸民族を別個のものとしてまったく区別していなかった」、「中国では長城の外側の土地全体をタターリヤと総称しており、それゆえ、当然このレアオトン、ダウリヤ、モンゴリヤの国境沿いに都市を築くことが考えられよう」と書いた（ミルレル：181, 171）。

- 6) 今後のマルチ・メディア教材においては、いわゆる「東アジア」の文化的共通性の根拠とされる「漢字文化圏」という言い方が隠してしまっている「漢字」の表記と意味と発音の多様性について注意を払う必要があるだろう。
- 7) 歴史教科書では言及されることのない「イノケンチイ大主教」（本名イヴァン・ヴェニアミノフ）（1797-1879年）について以下に簡単に紹介する。彼はイルクーツク地方に生まれ、イルクーツク・ブラゴヴェシチェンスク教会で最下級の聖職位・輔祭として勤め始め、ロシア領アメリカ、カムチャツカ、アレウト諸島、北アメリカの「住人たち」に布教し、聖書の現地語訳をおこない、1840年に「カムチャッカ・クリル・アレウト主教」に叙聖され、その後ブラゴヴェシチェンスクを拠点としながらアムール沿岸地方を布教しただけでなく、函館にいた宣教師ニコライを訪ね日本語を研究するよう指示したといわれている。1865年に帝政時代のロシア正教会の最高世俗機関である宗務院の一員になり、69年にはモスクワ府主教に任命されたという。（参照：イノケンチイ、イノケンチイの旅）
- 8) この時期のブラゴヴェシチェンスクについては、石光真清の手記（石光真清『曠野の花』中央公論社、1978年；1998年第10版）が知られている。この手記の著者は明治三十二年（1899年）に陸軍参謀本部の指示で「ブラゴヴェシチェンスク」に「留学」した人物である。「手記」とはいえ著者の子息によって編集されたうえ過去時制で書かれている。そこに描かれている同市は「ロシア軍のシベリアにおける最大根拠地」（18頁）、「東亜征服の最大の軍事拠点」（37頁）である。「海蘭泡」事件についても「東亜における有史以来最大の虐殺」、「この日から大東亜争覇の大仕掛けな血闘史が幕を切って落とされた」（37頁）と表現し31頁にわたって詳述している。同市に暮らしていた人々について「在留邦人、と言っても洗濯屋、女郎屋の主人、ペンキ職人など十数名の男子と、あとは二十名余りの女郎衆である」（20頁）、「清国人」は「約三千名がおり、多くは苦力（クーリー）と食料行商人で、立派に商舗を開いている者は約一割にすぎなかった」（31頁）、「ボーイ」と呼ばれた少年を含む「清国人の使用人」の雇主は「ロシア人」「日本人」「韓国人」（35-36頁）であったと伝えている。他方、対岸の町「愛暉城」を「ブラゴヴェシチェンスクに対する物資の供給地であり、ゼーア金山の砂金が密輸入される土地」（22-23頁）と特徴づけ、「総督將軍」は城郭周辺を支配するだけでそれ以外の土地は「馬賊」が治めているという二重権力状態を指摘している（25頁ほか）。また愛暉についてのロシア軍大尉の発言「『実に不潔な町だね。[馬賊の一員の]晒首は見たかい。まあ清国は一世紀遅れているね。これを指導してやるのが文明人の義務さ。東清鉄道が開通してロシアの文明が入ってゆけば面目を一新するだろう』」（26頁）を伝えている。また『中国歴史』が強調する「江東六十四屯地区」について「ことごとく焼き払われ、その住民は徹底的に殺された」と指摘し「目的は国境の安全を保つために清国側河岸に都市の建設を断念させることと、ロシアに刃むかうものは今後もかくの如き惨禍を加えられるであろうことを思い知らせるためであつたらう」と推測し（46頁）、対岸からの「襲撃」に対する「懲戒」として「愛暉及び黒竜江（アムール）沿岸の諸村落即ちロシア

に向って攻撃を敢えてせる諸市村落は焼かれ汝等の兵旅は殺され、ために黒竜江（アムール）の水は満人の屍によって汚されたり。爾後、満洲人は誰たるを問わず黒竜江沿岸の諸村落に帰来するを許さず」と述べた「軍務知事兼黒竜江軍事総監」の「清国人に告ぐ」と題する布告を紹介している（46頁）。他方、「増世策」という「馬賊」の頭目が石光に語ったとされる対岸、愛暉側の事情は次の通りである。この「増世策」が尊敬する齊々哈爾（チチハル）の「宋紀先生」という人物が「義和団事件が起って間もなく、北京から説客が来まして愛暉の蹶起を促しましたので、愛暉駐屯隊の劉謙徳という人と結託してロシアに戦を挑んだのですが、目算を誤って敗れてしまい、戦死したということです。一説には、砲撃の前夕日に密かにブラゴヴェヒチェンスクに潜入して配下の者と計り、砲撃と同時に攪乱を開始しようとしたが、ロシア側の処置が早くてあの大屠殺に遭って無念の最期を遂げたとも言われています」（102頁）。またこの事件を機に青森の学者・笹森儀助がロシアに足を踏み入れるなど同時代人のこの事件への関心は極めて高かったことも伝えている。同時期には政治流刑者としてロシア最初のマルクス主義組織《労働解放》団のメンバー・Л.Г. デイチがブラゴヴェシチェンスクで新聞『アムール地方』を編集しており、元ナロードニキヤポーランド革命家たちがこの地に暮らしていた（写真物語：50）ことも知られている。

- 9) アイデンティティ・ポリティクスに立脚した様々な排他的な東アジア史認識が20世紀末の日本の歴史教育をとりまく状況の中で表出し、それが国際政治上の一つの問題となっている。このことは、歴史認識の問題が一国内のアイデンティティ・ポリティクスの問題として完結していないことを示している。あれこれの歴史認識は、ある程度ナショナル・アイデンティティを暗黙の前提とする側面もあるが、リアルな過去の出来事は、特定の「構成された」ナショナル・アイデンティティの視点から語り尽くされるものでもない。リアルな過去の出来事は比喩的に言えば「無国籍」であるからこそ歴史研究者は共通の基盤の上に立って国際的に討論を行うことができる。過去の出来事を特定のナショナルリティによって独占的に表象することは、他者に対して抑圧的な作用をもつ態度しかもたらさない。これらの問題に対して積極的に応えようとしたのが、1997年の国際シンポジウム「東アジア地域における新しい歴史表象をめざして：歴史研究と歴史教育との対話」（上越教育大学）での「対話の継続」として1999年にウラジオストクで開催された国際学術会議「東アジアにおける歴史教育の諸問題：教師と研究者との対話」である。この会議の組織者B. П. ラーリン教授は、基調報告「歴史教育と東アジア諸国・諸人民の相互作用の展望」のなかで自国の歴史教育の現状について次のように発言した。「歴史教育の現状について何を言うことができるだろうか？ロシアの（*Российское*）歴史教育は、学校でも大学でも、露骨にヨーロッパ中心なのである。[...]ヨーロッパが中心化されている『世界史』の中では、東アジアは主として《前進するヨーロッパ》の働きかけを受ける被験者のような存在（サブジェクト）、特殊な発展の見本、異国趣味（エキゾチズム）の対象として表象されている。それだけではなくロシアの歴史教育においては、ロシア（*Россия*）自体の歴史が、ロシアのヨーロッパ部〔ウラル山脈以西〕の歴史なのである。いやもっと正確に言えば、モスクワおよびサンクト・ペテルブルグの歴史なのである。[...] もうひとつ本質的な問題がある。それは獲得される歴史知識の性格である。ロシアの歴史教育は、政治史、経済史、軍事史の学習をするよう方向付けられていて、エスニックで文化的なものではない。[...] 制約された知識、近隣諸民族に対する偏見にとらわれた道徳教育、政治談議への熱中の帰結は一目瞭然である。ロシアのアジア部の住民は、自分たちの隣人について知らないのである。

しかも最も悲しいことに、知ろうとしないし理解しようとしないのである」。このように述べたあとで彼は、教師が歴史教育を「愛国心」高揚のために利用することはやめ、国際紛争に関わる議論の論拠として歴史を利用するのをやめようと呼びかけた。地域の歴史教育の現状を克服するための新しい教材開発の実践的な試みとして編纂されたのが、沿海州教員研修・資格向上大学のイニシアティブでロシア科学アカデミー極東支部・極東諸人民歴史考古民族学研究所の研究員たちが執筆し、沿海地方行政府国民教育庁の推薦図書として発行された『ロシア沿海州史：普通学校第8-9学年用副読本』（1998年）である。その序の中でE. И. ナズドラチェンコ沿海地方知事は、次のように述べている。「沿海州（プリモリエ）は、ロシアの不可分の構成部分でありつつも、東洋の隣人たちと経済的に緊密に結びつかないわけにはいかないのである。政策においてロシアは最大限、ロシア極東領域の利害を考慮するとともに、アジア太平洋地域の国々の相互関係の歴史的経験を考慮しなければならない。何世紀にもわたってこの領域は、東アジアの経済的・文化的空間の一部であり、多様な人種[ママ]、民族、文化の担い手たちがそこに暮らし開拓してきた郷土であった。郷土の歴史は、沿海州の少数民族によって担われている文化遺産を大切にすることが必要だと我々に教えてくれている。この遺産は、郷土やロシアのものだけでなく、全世界のものでもある」（沿海州史：4）。このような地域史理解は、自治体政府の教育政策の分野における戦略的課題を十分意識したものであり、その具体化の一例として参照に値するものである。同時に副読本の本文、その実践的な活用場面の実態については別途検討する必要がある。また全国的なレベルでも現行の教科書の在り方に対して問題が提起されている。カルロフ「書物と教科書」（『哲学の諸問題』2000年第3号）は、従来、教科書執筆者はアカデミズムのいわゆる「大学者たち」であったが、より学校現場と社会の需要に応え、学生の意見も採り入れた教科書が必要であると指摘している。西欧中心の歴史教育の現状を克服するために「地域」に注目する点は重要であるが、地域の出来事をどのように提示するかが今後問題となろう。ウォーラーステインのソウルでの学会報告「ヨーロッパ中心主義とその化身達：社会科学のジレンマ」（Immanuel Wallerstein, "Eurocentrism and its avatars: The Dilemmas of Social Science", *New Left Review*, N.226, Nov.-Dec. 1997, pp. 93-107.）は、ヨーロッパ中心主義の表出様式として「歴史学」と「オリエンタリズム」とともに、それらの裏返しの表現としての「反ヨーロッパ中心主義」も挙げている。他方でポスト・コロニアル批評の立場からは、修辞や思考様式の次元でのウォーラーステインの議論に含まれる「ヨーロッパ中心主義」が告発されている（Gregor McLennan, "The Question of Eurocentrism: A Comment on Immanuel Wallerstein", *New Left Review*, N.231, Sep.-Oct. 1998, pp. 153-158.）。これらの英語圏での議論がいずれも支配的な言語システムの枠内で行われていることに注意を向ける必要がある。「東アジア」の文脈でも、活字文化の表層に立ち現れる「漢字」（往時の文化的ヘゲモニーの痕跡であり、東アジア各地での様々な独自の派生形を含む）、ハングル、ひらがな・カタカナ、そしてギリシャ文字起源のキリル文字…、そしてこれらの異なる活字文化の担い手が互いに意志疎通しようとする場合に登場する英語、これらが錯綜した（オーラルな次元では一層複雑な）文化状況を踏まえたうえで改めて立論される必要がある。

\*本稿は、平成11年度科研費補助金（課題番号：10359002）による研究成果の一部である。

## 文献一覧

- ダリンスキー, A.V. (小俣利男訳) 『ロシア：ソ連解体後の地誌』, 大明堂, 1997年。[原典：  
Даринский, A. V. и др. География России: Учебник для 8-9 классов средней школы. М.:  
Просвещение, 1993. 筆者未見]
- アレクセエフ：Алексеев, А. И. Николина, В. В. Население и хозяйство России: Учебник для 9  
класса общеобразовательных учреждений. М.: Просвещение. 1995. : Алексеев, А. И.  
Николина, В. В. География: Население и хозяйство России: Учебник для 9 класса  
общеобразовательных учреждений. 2-е изд. М.: Просвещение, 1996. ;4-е изд. , 1998.
- ラコフスカヤ：Раковская Э. М. География: природа России: Учебник для 8 класса  
общеобразовательных учреждений. 2-е изд. М.: Просвещение, 1998.
- グラツキイ：Гладкий, Ю. Н., Лавров, С. Б. Экономическая и социальная география мира:  
Учебник для 10 класса общеобразовательных учреждений. 4-е изд. М.: Просвещение, 1998.
- ルィバコフ：Рыбаков Б. А. и др. История СССР. Учебник для 7 класса средней школы. Изд. 2-е,  
М.: Просвещение, 1987.
- プレオブラジェンスキイ：Преображенский, А. А. Рыбаков Б. А. и др. История Отечества:  
Учебник для 6-7 класса средней школы. Изд. 4-е М.: Просвещение, 1999.
- ユドフスカヤ：Юдовская, А. Я. и др. Новая история. 1500-1800: Учебник для 7 класса средней  
школы. Изд. 2-е, М.: Просвещение, 1998.
- サハロフ：Сахаров, А. Н. и др. История России с древнейших времен до конца XVII века:  
Учебник для 10 класса общеобразовательных учреждений. 4-е изд. М.: Просвещение. 1998.
- パヴレンコ, アンドレエフ：Павленко Н. И. Андреев, И. Л. Россия с древнейших времен до  
конца XVII века. Учебник для 10 класса общеобразовательных учреждений. М.:  
Просвещение 1997.
- ズィリヤノフ：Зырянов П. Н. История России, XIX век. Учебник для 8 класса  
общеобразовательных учреждений. 2-е изд. М.: Просвещение. 1998.
- ブガノフ：Буганов, В. И. Зырянов П. Н. История России, конец XVII-XIX век: учебник для 10  
класса общеобразовательных учреждений. 4-е изд. М.: Просвещение. 1998.
- パヴレンコ, リャシェンコ：Павленко Н. И. Ляшенко Л. М. Твардовская, В. А. Россия в конце  
XVII-XIX веке. Учебник для 10 класса общеобразовательных учреждений. 2-е изд. М.:  
Просвещение. 1997.
- シェロハエフ：Шелохаев В. В. История России, 1861-1917: Экспериментальное учебное  
пособие для средних школ. Под общей ред. В. В. Шелохаева. М.: ТЕЕППА, 1996.
- ダニロフ：Данилов, А. А., Косулина, Л. Г. История России. XX век: Учебник для 9 класса  
общеобразовательных учреждений. 4-е изд., доработанное, М.: Просвещение. 1998.
- レヴァンドフスキイ：Левандовский, А. А. Щетинов, Ю. А. Россия в XX веке: Учебник для 10-11  
классов общеобразовательных учреждений. 2-е изд. М.: Просвещение. 1998.
- ソロコーチュブ：Мир в XX веке. Учебник для 11 класса общеобразовательных учреждений.  
Под ред. О. С. Сороко-Цюпа. 2-е изд., переработанное и дополненное. М.: Просвещение.  
1998.
- アトラス：Атлас: Благовещенск. Хабаровск. 1997.

- 写真物語：Благовещенск: Фоторассказ. Благовещенск, 1998.
- 博物館：Амурский областной краеведческий музей. Благовещенск, 1990.
- 絵葉書：Благовещенск. М.: Планета, 1989.
- 絵葉書へいへ：*Амурская областная туристско-экскурсионная фирма* Благовещенск-Хэйхэ.
- キリルロフ：*Кириллов, А.* Географическо-статистический словарь Амурской и Приморской областей со включением пунктов сопредельных с ними стран. Благовещенск, 1894.
- スコルボヴィチ：*Сколубович, Г. В.* "Натуральная оспа у аборигенов Сибири и Дальнего Востока", *Амурский областной краеведческий музей им. Г. С. Новикова-Даурского* Тезисы докладов научно-практической конференции "Проблемы изучения и сохранения культурно-исторического и природного наследия Дальнего Востока", посвященной 105-летию Амурского областного краеведческого музея. Благовещенск, 1894
- 写真集：Встречь солнца: История освоения Дальнего Востока. Владивосток: Уторо России, 1998.
- イノケンチイ：*Амурский областной краеведческий музей им. Г. С. Новикова-Даурского* Инокентий Вениаминов (Первый архиепископ Камчатский и Курильский и Акеутский, Митрополит Московский и Коломенский). Благовещенск, 1993.
- イノケンチイの旅：Путешествия и подвиги святителя Иннокентия, митрополита Московского, апостола Америки и Сибири. М.: Даниловский благовестник, 1999.
- ソ連極東史：История Дальнего Востока СССР в эпоху феодализма и капитализма (XVII в. - февраль 1917г.). Ответственный редактор А. И. Крушанов, М. Наука, 1991.
- 沿海州史：История российского Приморья: Учебное пособие для 8-9-х классов общеобразовательных учреждений всех типов. Владивосток: Дальнаука, 1998.
- ミルレル：*Миллер, Г. Ф.* История Сибири. Изд. 2-е. т. I, М.: Восточная литература, РАН, 1999.
- カルロフ：*Карлов, Н. В.* "Книги и учебники", Вопросы философии. 2000, N. 3.
- ロシアの都市：Города России: Энциклопедия. М., 1994.

## **Проблемы исторических представлений о “Амуре/ Хейлунцзяне”.**

Тосиюки Симосато\*

### **АВТОРЕФЕРАТ**

В данной статье освещаются исторические представления о “Амуре/Хейлунцзяне” в Российских и Китайских школьных учебниках и на местных изданиях, которые изданы в г. Благовещенске. В результате анализа выяснено то, что нужны новые представления об истории этого региона для образования новой типа личности а с целью гармонизации человеческого общежития.

---

\* Division of Social Studies